

日本通訳翻訳学会 第 27 回年次大会

スケジュール
交通アクセスと会場案内
基調講演
予稿集

2026 年 8 月 29 日(土)～30 日(日)
会場 東京大学 本郷キャンパス

日本通訳翻訳学会 第 27 回年次大会スケジュール

開催日: 2026 年 8 月 29 日(土)～30 日(日)

会場: 東京大学 本郷キャンパス 教育学部棟・赤門総合研究棟

第 1 日(8 月 29 日)

9:45	赤門総合研究棟 1F エントランス(午後からは教育学部棟 1F エントランスにて受付) 受付開始		
10:00	200(赤門総合研究棟 2F)		
-10:10	開会式		
	200(赤門総合研究棟 2F) A 会場	158(教育学部棟 1F) B 会場	109+159(教育学部棟 1F) C 会場
10:20	A-1 A-2「弁護通訳における質の確保に向けた取り組み: 大阪弁護士会の実践を中心に」 道上史絵(愛知県立大学)、かどやひでのり(津山工業高等専門学校)、正木幸博(大阪弁護士会)、東向有紀(大阪弁護士会)、吉田理加(愛知県立大学)、村上智里(関西大学)	B-1「日中翻訳に見られる方言の指標性のシフトと言語イデオロギーの働き: アニメ『はたらく細胞』における方言対訳場面を例に」 王遠帆(大阪大学 D) (司会: 飯田奈美子)	C-1「通訳技術の汎用性を考える: 東京大学での講師経験より」 賀来華子(東京大学) (司会: 長沼美香子)
-10:50			
11:00		B-2「日中翻訳における関係節処理: 統語層と意味層の「等価のずれ」をもたらす非明示的要因」 大西道子(関西学院大学 D) (司会: 飯田奈美子)	C-2「翻訳に関する ISO 国際規格の高等教育への活用: 専門性と資格の枠組みから」 佐藤晶子(京都外国語大学)、アイシュワリヤ・スガンディ(京都外国語大学)、パツラヴィ・パツテ(京都大学) (司会: 長沼美香子)
-11:30			
11:40	A-3「翻訳通訳の専門職団体による提言・立場表明: AI 通訳の事例を中心として」 武田珂代子(立教大学) (司会: 山木戸浩子)	B-3「ポストエディット作業における日中産業翻訳者の訳文品質の自己評価」 単凱(東京科学大学 D)、佐藤礼子(東京科学大学) (司会: 飯田奈美子)	C-3「多様化するビジネス場面における通訳者の現状」 高橋絹子(関西大学) (司会: 長沼美香子)
-12:10			
12:10	休憩	450A(教育学部棟) (12:20 - 13:20) 評議員会	208(赤門総合研究棟) (12:20 - 13:20) 院生コロキウム 院生有志による自主セッション (司会: 山本真佑花)
-13:30			
	200(赤門総合研究棟 2F) A 会場	158(教育学部棟 1F) B 会場	109+159(教育学部棟 1F) C 会場
13:30	A-4 A-5「社会インフラとしてのコミュニティ通訳」研究が果たすべき役割とは」 吉田理加(愛知県立大学)、飯田奈美子(関西大学)、田村智子(国際基督教大学)、水野真木子(金城学院大学)、蓮池通子(手話通訳士・愛知県立大学 M)、武田珂代子(立教大学)、ノーマ・キャロライン(立教大学)、福野茉穂(RMIT 大学)、道上史絵(立命館大学)、杉本篤史(東京国際大学)、グエン・タン・タム(愛知県立大学)、ベリャコワ・エレナ(ロシア語通訳者)	B-5 “Encoding Interpersonal Stance in Webtoon Translation: Korean Sentence-Final Expressions in Japanese and English Versions of Lookism” Vasilev Todor (Kobe University D) (司会: 山木戸浩子)	C-4「アニメーション映画におけるオラリティと人物像の関連: 日本語吹き替え版における役割語とアーキタイプの共生関係に関して」 Laura Gómez Pérez (神戸大学 D) (司会: 篠原有子)
-14:00			
14:10			C-5「『モアナと伝説の海』における字幕翻訳分析: 映画を活用した英語教育への示唆」 上田悠莉(武庫川女子大学 D) (司会: 篠原有子)
-14:40			
15:00	福武ラーニングシアター(情報学環・福武ホール) 総会		
-15:50			
16:00	福武ラーニングシアター(情報学環・福武ホール) 基調講演 「情報通信研究機構におけるテキスト翻訳・同時通訳の研究開発と展望」 内山将夫 (情報通信研究機構多言語・多文化コミュニケーション研究室室長) (司会: 宮田玲)		
-17:20			
18:00	カボ・ベリカーノ(医学部教育研究棟 13F) 懇親会 ※懇親会費 5,000 円(学生 3,000 円)		
-20:00			

第 2 日(8 月 30 日)

	200(赤門総合研究棟 2F) A 会場	158(教育学部棟 1F) B 会場	109+159(教育学部棟 1F) C 会場
10:00 -10:30	A-6「被曝体験記の日英翻訳研究: 談話分析の手法による蜂谷道彦「広島」の原爆雑話」英訳の分析」 歳岡冨香(近畿大学) (司会: 藤濤文子)	B-6「医療通訳者養成における「心構え」講座の役割と限界: 短期集中型研修における実践報告」 服部しのぶ(鈴鹿医療科学大学) (司会: 石原知英)	C-6「多言語辞書データにおける防災用語の日中翻訳の再検討」 楊潔氷(福山大学)、徐芳芳(浙江理工大学) (司会: 野原佳代子)
10:40 -11:10	A-7「文学翻訳者のエージェンシーとフェミニズム」 古川弘子(東北学院大学) (司会: 藤濤文子)	B-7「通訳教育による学びと意識の変容: フォーカスグループ・インタビュー調査の予備的考察」 新崎隆子(NHK グローバルメディアサービス)、鶴田知佳子(東京外国語大学) (司会: 石原知英)	C-7「災害時における通訳・翻訳コーディネーターの役割: インタビュー調査から」 山浦育子(江戸川区多文化共生センター) (司会: 野原佳代子)
11:20 -11:50	A-8「翻訳か、剽窃か? : 山川菊栄の初期「訳述」活動をめぐって」 キャロライン・ノーマ(立教大学) (司会: 藤濤文子)	B-8「英語の達人」とされる通訳者の先人たちの学習方略(追跡調査): 60 歳代の場合」 内藤稔(東京外国語大学)、高橋絹子(関西大学) (司会: 石原知英)	C-8 “The Future Role of Disaster Translation” Nana Sato-Rossberg (SOAS University of London) (司会: 野原佳代子)
11:50 -13:00	休憩 教育学部棟ラウンジ(158 前) ポスター発表(12:00 - 12:50) P-1 “Translating “Hong Shao Rou”: A Skopos-Theoretical Analysis of Chinese Recipe Translation in Online English-Language Media” Ruisi Han (International Christian University M)		450A(教育学部棟) (12:00 - 12:50) 理事会
	200(赤門総合研究棟 2F) A 会場	158(教育学部棟 1F) B 会場	109+159(教育学部棟 1F) C 会場
13:00 -13:30	A-9 A-10「日本の Translator Studies 確立のための基盤研究プロジェクト」報告と可能性探究のオープンディスカッション」 古川弘子(東北学院大学)、北代美和子(翻訳家)、齊藤美野(順天堂大学)、長沼美香子(青山学院大学)、尹恵貞(中央大学)、澤田晶子(関西大学 D)	B-9「ホワイトハウス記者会見における通訳の不使用が談話の展開にもたらす影響: 高市・トランプ会見(2026 年 3 月)とゼレンスキー・トランプ会見(2025 年 2 月)の比較分析」 田村智子(国際基督教大学) (司会: 朱藹琳)	C-9「中国清朝の 2 つの翻訳論の比較」 北村彰秀(モンゴル聖書宣教会) (司会: 大久保友博)
13:40 -14:10		B-10「外国にルーツをもつ子どもとその家族への支援とコミュニティ通訳の位置づけ: 当事者性による認識の差異に着目して」 佐藤晶子(京都外国語大学)、河野弘美(京都外国語短期大学)、稲垣勉(京都外国語大学)、グリゴリー・ミソチコ(京都外国語大学) (司会: 朱藹琳)	C-10「英語の観光ガイドブックにおける文化特有アイテム(CSI)の翻訳分析: 翻訳手法の観点から」 浦修子(大阪体育大学)、高橋絹子(関西大学) (司会: 大久保友博)
14:20 -14:50	A-11「AI 時代の翻訳研究におけるスコボスの再定義について」 藤濤文子(神戸大学) (司会: 齊藤美野)	B-11「医療通訳における文脈負荷の記述: インドネシア語パイロット調査の設計と結果」 岩田晶子(東京外国語大学 D) (司会: 田村智子)	C-11「逐次通訳の情報処理モデルについて」 晏昭平(城西国際大学 D) (司会: 石塚浩之)
15:00 -15:30	A-12「翻訳学の観点から見る『欧文反省雑誌』(明治 30-31)の日本表象」 佐藤美希(札幌大学) (司会: 齊藤美野)	B-12「ボランティア通訳者を介した医療相談通訳の相互行為分析: 通訳者の参与枠組みからの考察」 森元亜紀子(神戸市外国語大学 D) (司会: 田村智子)	C-12 “Machine Translation Error Analysis of Japanese Nursery School Documents: A Study of Google Translate from Japanese into Uzbek” Zebiniso Izzatillaeva (Kinjo Gakuin University M) (司会: 石塚浩之)
15:40 -16:10	A-13「観光・通訳・翻訳の交差点: 井上勤と Clifford Bax の日本旅行および漢詩英訳」 連子心(筑波大学 D 満期退学) (司会: 齊藤美野)	B-13「会話の協働構築への働き「詳細質問」についての考察: 母子保健場面の対話通訳コミュニケーションの会話分析」 飯田奈美子(関西大学) (司会: 田村智子)	C-13 “What EEG reveals about SI with automatic subtitles: From theta power to brain-network dynamics” Tianyun Li (Changzhou University) (司会: 石塚浩之)

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 研究発表・講演の撮影・録画・録音は、発表者・講演者の許可を得ている場合を除き、ご遠慮ください。
- 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課

程の学生会員であることを示します。

- C会場の発表者は教育学部棟109にお越しください。教育学部棟159は109のサテライト会場です。
- 教育学部棟357は、休憩室としてご利用いただけます。お昼時など自由にご利用ください。
- 教育学部棟ラウンジ(158前)はポスター発表会場として使用するほか、出版社による書籍展示・販売も行っています。

参加者の皆様へ:

- 年次大会・総会への参加登録は、以下のURL・QRコードの申し込みフォームから行ってください。
(返信用ハガキでの出欠確認はいたしません。)学会ウェブサイトにもリンクがあります。

- ・参加登録(年次大会・総会・懇親会)フォーム:

<https://forms.gle/6xHcuMbh5BtJYYsT8>



参加登録



懇親会費支払い

- ・懇親会費支払い(Peatixより事前支払い):

<https://jaits-2026-banquet.peatix.com>

当日のお申し込みは現地にてご相談ください。

- ・日本通訳翻訳学会ウェブサイト: <https://jaits.jp/>

- 参加登録・懇親会費支払いの締め切り

- ・手話通訳等の合理的配慮を希望する場合:

可能な限り、7月29日(水)までに参加登録をお願いします。基調講演以外のセッションで手話通訳をご希望の方は、フォームにて参加予定の発表を選んでいただきます。

- ・懇親会に参加する場合:

8月18日(火)までに参加登録および懇親会費の支払いをお願いします。

- ・その他の場合:

8月23日(日)までに参加登録をお願いします。

発表者の皆様へ:

- 発表用PCは各会場に用意します。

- 研究発表用のプレゼンテーションファイルは、原則としてPDF形式で、8月28日(金)正午までに発表者用フォーム(<https://forms.gle/iwpaVBSTZShtBVARA>)にご送付ください。パワーポイント形式の場合は、発表用PCにおいてレイアウト上のずれが発生する場合があります。

- ご自分のPCを使う必要のある方も、その旨を上記発表者用フォームより伝達してください。また当日、事前に余裕をもって接続確認をお済ませください。PCにHDMIの接続口がない場合は、必要なアダプタをご用意ください。

- 資料を配布いただくことも可能です。配布される場合は、ご自身で必要部数(40部程度)をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、会場スタッフがお手伝いいたします。

- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。ポスターのサイズはA0あるいはA1(縦横の指定なし)をご用意ください。コアタイム(ポスター発表会場に発表者が必ずいる時間)は2日目の12:00-12:50です。ポスターは、1日目の午前から掲示いただけます。

- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿/二重発表、剽窃・盗用などには十分ご注意ください。



発表者用
フォーム

[第27回年次大会実行委員会]

宮田玲(委員長)、影浦峯、本田友乃、山岸聖子、山本真佑花

[大会プログラム担当理事]

齊藤美野、藤濤文子

交通アクセス

東京大学本郷キャンパス

◎東京大学はキャンパスが複数あります。お間違えのないようご注意ください。



所在地: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

※赤門は現在閉鎖中です。地図上、伊藤国際学術研究センター門もしくは正門をお使いください。

■ 最寄り駅:

1. 本郷三丁目駅(地下鉄丸の内線): 徒歩7分
2. 本郷三丁目駅(地下鉄大江戸線): 徒歩7分
3. 東大前駅(地下鉄南北線): 徒歩11分
4. 湯島駅(地下鉄千代田線): 徒歩13分
5. 根津駅(地下鉄千代田線): 徒歩17分
6. 春日駅(地下鉄三田線): 徒歩14分

■ 会場: 総会・基調講演(8/29午後)と研究発表(8/29・8/30)は建物が異なりますのでご注意ください(移動時間は2〜3分)。また、研究発表会場も、赤門総合研究棟と教育学部棟に分かれています。

■ 受付: 8/29午前は赤門総合研究棟1Fエントランスにお越しください。それ以降は、教育学部棟1Fエントランスにお越しください。

■ 懇親会: 地図上、医学部教育研究棟13階「カポ・ペリカーノ」で開催します。

アンチハラスメントポリシー

本大会では、会員・非会員の区別なく、すべての参加者が差別や威圧、ハラスメントを受けることなく、対等かつ自由な意見表明や議論を行える安全な環境の確保を目指しています。本大会のあらゆる活動(発表・質疑応答、休憩時間中のコミュニケーション、懇親会、および関連するSNS上での交流等)において、以下の行為を含むあらゆるハラスメント行為を容認しません。

- 人種、国籍、言語、性別、年齢、障害等に基づく差別的発言、揶揄、不当な取り扱い
- 教育・研究上の優位な立場を利用した不当な要求や精神的圧迫
- 執拗なつきまとい、望まない身体的接触、無断での録音・録画・写真撮影、肖像権等を侵害するSNSへの投稿
- 懇親会等におけるアルコール飲料の強要、望まない二次会等への参加の強制

ハラスメントを受けた場合や目撃した場合は、大会運営スタッフにお伝えいただくか、下記の相談窓口へご連絡ください。関係者の個人情報と相談内容は、適切に保護されます。

本ポリシーは、客観的証拠と論理に基づく厳格な学術批判を制限するものではありません。相手の人格を尊重し、根拠や具体例に基づき建設的な議論を行ってください。

相談窓口:

年次大会実行委員会

担当委員: 宮田玲、山岸聖子

jaits-2026-antiharassment@googlegroups.com

第1日(8月29日) 福武ラーニングシアター(情報学環・福武ホール) 16:00 – 17:20

基調講演

「情報通信研究機構におけるテキスト翻訳・同時通訳の研究開発と展望」

内山将夫

(情報通信研究機構 多言語・多文化コミュニケーション研究室 室長)

要旨

コーパスベースの機械翻訳の概要を説明した後で、情報通信研究機構(NICT)の機械翻訳エンジンの性能と利用例、および、みんなの自動翻訳@TexTraサイトについて報告する。次に、NICTの自動同時通訳技術、および、最近のマルチモーダル音声認識技術について説明する。さらに、NICTの大規模言語モデル(LLM)の利用例を述べ、昨年度の実証実験を紹介し、最後に、今後の研究開発の展望を述べる。

プロフィール

日本語に関係する世界最高精度の自動翻訳エンジンを構築し、それを世の中に普及するための研究開発に従事している。また、多言語・多文化対応の大規模言語モデル(LLM)の研究開発に従事している。現在、情報通信研究機構の自動翻訳エンジンの開発を指揮しており、2014年6月に、みんなの自動翻訳@TexTraを公開し、2017年6月には、VoiceTraにニューラル自動翻訳エンジンを導入した。1997年3月、筑波大学大学院工学研究科修了、博士(工学)。現在、情報通信研究機構 多言語・多文化コミュニケーション研究室 室長。



司会

宮田玲(東京大学)

第1日(8月29日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 10:20 – 11:30

A-1 A-2

弁護通訳における質の確保に向けた取り組み:大阪弁護士会の実践を中心に

道上 史絵(立命館大学)、かどや ひでのり(津山工業高等専門学校)、正木 幸博(大阪弁護士会)、東向 有紀(大阪弁護士会)、吉田 理加(愛知県立大学)、村上 智里(関西大学)

適正な通訳は、特に医療・教育・司法の三領域において、基本的人権の保障に必要な条件のひとつを構成している。前二領域においては、個人から行政機関にいたるまで、調査と課題の検出が行われ、試行錯誤が続いている。それに対し、司法分野における通訳は、その性質上、過剰に高い機密性が要請され、実態の把握すら十分には行われていない。その結果、質的向上のための施策も遅れている(長尾, 2000; Tsuda, 2002; かどや他, 2024)。本セッションは、そうした認識のもと、稀有な試みが行われている大阪での事例を中心に、情報と課題の共有を図ることを目的としている。

裁判員裁判の導入(2009年5月)に伴い、刑事事件における通訳の質の問題が顕在化する恐れが予想されたことから、大阪弁護士会では、その対策のひとつとして「通訳能力判定試験」を創設することとした。試行を重ねた上で2015年から実施され、現在は中国語、韓国語、ベトナム語について年一回試験が行われている。結果は三段階で評価され、かつ大阪弁護士会及び法テラス大阪が利用する通訳人名簿に記載される⁽¹⁾。弁護士はその名簿の中から通訳人を指名するので、低い評価の通訳人は指名されにくく、高い評価を受けた通訳人には多くの指名が来るようにという意図がある。

試験には筆記試験と実技試験があり、筆記試験は①法律関連の単語テスト(10分)、②和文外国語訳テスト(25分)、③通訳倫理テスト(10分)で構成される。②の題材は、勾留状記載の被疑事実、司法手続の説明例、入管法関連の説明例等である。実技試験は、弁護士が実際に経験した事件をデフォルメして模擬接見を行い、その通訳をやってもらうものである。試験官は弁護士、領事館職員、大阪大学外国語学部教授等である。

試験の実施においては、時間や人的リソースの制限があり、現在も課題は残されている。しかし、関係者の通訳の質の確保に対する問題意識を背景に、大阪弁護士会は上記の取り組みを実現させている。上述のように、司法通訳の質の確保の課題は関係者に広く共有されていると考えられるが、大阪以外の地域では対策が限定的な範囲にとどまっているようである。大阪弁護士会で実施されているような取り組みを、他地域、さらに司法の他機関でも実現できるのか、また実現を妨げるものがあればそれを明らかにした上で、どのような対策を講じ得るのかについて、司法通訳に関わる実務家・研究者を含め検討を進めていく必要がある。

【注】

⁽¹⁾ 最も低い評価であった場合、名簿に結果は記載されない。

【参考文献】

長尾ひろみ(2000)「司法通訳の公的資格制度を目指す立法を」『法学セミナー』45(10), pp.1-3
かどやひでのり・道上史絵(2024)「フィリピン(タガログ)語誤訳事件にみる日本の捜査通訳制度」

『社会言語学』24, pp.79-91

Tsuda, M. (2002) Non-Japanese Speaking Suspects: Defendants and the Criminal Justice System in Japan, *Interpretation Studies*, 2, pp.1-14.

付記: 本研究は JSPS 科研費 JP24K04093 の助成を受けたものです。

第1日(8月29日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 11:40 – 12:10

A-3 司会: 山木戸浩子

翻訳通訳の専門職団体による提言・立場表明: AI 通訳の事例を中心として
武田 珂代子(立教大学)

専門職団体とは、高度な専門知識や技能が要件となる職業に従事する人たちの組織で、一般に、会員の専門性の維持や向上、権利の擁護や社会的地位の促進、職務倫理の保持、公共の利益への貢献、会員間の交流などを目的としている。翻訳通訳の領域では、国際的な専門職団体として国際会議通訳者協会(AIIC)や国際翻訳者連盟(FIT)などがあるほか、全米翻訳者協会(ATA)や全米司法通訳翻訳者協会(NAJIT)、豪州通訳翻訳者協会(AUSIT)、韓国翻訳者協会(KST)、日本翻訳者協会(JAT)、日本手話通訳士協会(JASLI)、全国医療通訳者団体(NAMI)、日本会議通訳者協会(JACI)など、日本内外で国別の組織がある。本発表では、これらの団体が翻訳通訳の専門家として政策決定者やユーザーなどに向けて情報、提言、立場表明などを発信する活動に焦点を当てる。特に注目する事例として、AI 通訳に関する各種団体の声明を取り上げ、考察を加える。

まず、活動年数や会員数などの点から代表的と考えられる国内外の翻訳通訳専門職団体の主な活動内容や職務倫理規定の概要を提示する。その中で、翻訳通訳に関連する政策や施策、また業界やユーザーの動きに対する見解の表明や提言、会員に対する啓発など、さまざまなステークホルダーに対する働きかけを行なっているかについて、団体ごとに確認する。次に、そうした働きかけの内容(たとえば、機密保持、遠隔通訳、紛争地での翻訳通訳、著作権などの課題に関するもの)を示し、その特徴を分析する。続けて、近年話題となっている AI 通訳や通訳者による AI ツールの使用に関して翻訳通訳専門職団体が表明しているさまざまな提言(AIIC の AI 通訳チェックリスト、通訳における AI 使用に関する FIT の立場表明など)の具体的内容を示す。その際、翻訳通訳と AI に関する課題に取り組む実務者と研究者の任意団体である SAFEAI や欧州言語評議会の「翻訳通訳と AI 専門部会」の提言なども参照する。また、AI ツールの活用に関して AIIC などが提供するセミナーについても触れる。最後に、AI 通訳に関する立場表明、研究者との連携、AI ツール活用の情報提供などの有無に関して団体間で異なる状況がある背景や、こうした活動が社会に及ぼす影響や意義について初期的な考察を加える。

第1日(8月29日) A会場(200(赤門総合研究棟2F)) 13:30 – 14:40

A-4 A-5

「社会インフラとしてのコミュニティ通訳」研究が果たすべき役割とは

吉田 理加(愛知県立大学)、飯田 奈美子(関西大学)、田村 智子(国際基督教大学)、水野 真木子(金城学院大学)、蓮池 通子(手話通訳士・愛知県立大学 M)、武田 珂代子(立教大学)、ノーマ・キヤロライン(立教大学)、福野 茉穂(RMIT 大学)、道上 史絵(立命館大学)、杉本 篤史(東京国際大学)、グエン・タン・タム(愛知県立大学)、ベリャコワ・エレナ(ロシア語通訳者)

本研究プロジェクト「社会インフラとしてのコミュニティ通訳研究:研究者・実践者・行政の(国際)連携」では、2024 年度からコミュニティ通訳を社会インフラとして捉え、研究者だけではなく、実践者や行政との連携を目指し活動している。日本の現状を見ると、医療・司法・行政など公共領域におけるコミュニティ通訳の必要性が十分に認識されているとはいえず、研究成果が現場環境や政策形成に反映されることは限定的であり、研究者としての無力感や閉塞感を抱えながら研究を続けているメンバーも少なくない。

本プロジェクトメンバーの田村が研究会で、村木(2020)を引用し、研究者の役割は「1 を 10 にすること」であると述べた。まず NPO や社会福祉法人のような現場の人々による課題提起により「0 が 1」になり、研究者はその課題を分析し理論化したものを提示することで「1 を 10」にする。理論が明確化したニーズの事業化は企業も試みるが、利益の出る範囲が限られていれば「10 を 50」にしかできず、よって全ての人々をカバーし「50 を 100」にするために具体的な法制度の整備設計を行うのが公務員であるという(村木, 2020, pp. 30-32)。そうならば、コミュニティ通訳研究を専門に研究する我々は、これまでどのような貢献をしてきたのか、今後どのように社会へ関与していくことができるのかという問いを抱くに至った。

近年、日本における外国人受入れ政策は急速に変化しており、「多文化共生」政策の中でも日本語教育重視、機械翻訳の利便性が強調されている。その一方で、医療・司法・教育・行政など公共サービスへのアクセスを支えるコミュニティ通訳・翻訳の必要性は十分に議論されているとはいえない。特に、AI 翻訳の急速な普及により、「言語アクセス保障」を人間ではなく機械で代替しようとする傾向が強まっている。AI 翻訳は一定の利便性を有する一方で、セキュリティ面や誤訳の危険性、さらには誤訳時の責任主体が不明確であるなど、多くの課題を抱えていることなど、危惧すべき点も少なくない。

本セッションでは、社会インフラとしてのコミュニティ通訳の今後について議論し、研究者は何にどのようにコミットし、社会に貢献できるのか、また研究成果をどのように社会や政策へ還元していくことができるのかを模索したい。当日は、フロアの参加者とも積極的に意見交換を行いながら、コミュニティ通訳研究の今後の方向性について共に考える機会としたい。

【参考文献】

村木厚子(2020).『公務員という仕事』. 筑摩書房.

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 10:00 – 10:30

A-6 司会: 藤濤文子

被曝体験記の日英翻訳研究: 談話分析の手法による蜂谷道彦「広島原爆雑話」英訳の分析
 歳岡 冨香(近畿大学)

翻訳(TT)の形成には、翻訳者や目標言語社会のイデオロギーが影響を与える(Baker, 2006)。これに着目する翻訳研究では、原作(ST)とTTの比較分析に談話分析の手法が使われてきた(Hatim & Mason, 1990; Munday, 2012; Wang & Munday, 2021)。本研究は、被曝体験記の日英翻訳について、Munday(2012)が提示した手法を使いTTを分析する。この手法はMartin and White(2005)のAppraisal Theoryを援用し、STに対する評価やTT読者に対する態度を表す記述に着目しTTを分析するものだ。証言翻訳研究では、出来事に対しSTが示す認識、目標言語社会の認識、それらを踏まえた翻訳戦略が焦点となる(Spiessens, 2022)。この点でも、Munday(2012)の手法は、被曝体験記翻訳分析に適していると考えられる。

本発表では、蜂谷道彦著「広島原爆雑話」の英語訳分析を扱う。STは広島で被曝した通信病院の医師の体験記で機関雑誌『通信医学』に連載された。TTは1955年出版の*Hiroshima Diary*である。翻訳者はアメリカ原子爆弾災害調査委員会のWarner Wellsだが、助手と通訳を務めたNeal Tsukifujiの尽力が大きい。発表では主に以下の例を指摘する。1) STには同等の記述が無いが、TTにはAppraisal Theoryでattitude, engagementを表す記述が加えられた例。2) STでの感情を表す記述(例えば「苦しい」)が、TTではアルファベット表記(*kurushii*)で残され、脚注にattitudeを表す記述を使った説明が加えられた例。3) STの「敵」「敵愾心」のTTでの扱いの例。

Hermans(2007)は、翻訳者の主観がTTの序文や脚注にも表れると指摘する。*Hiroshima Diary*は再版され、1995年版には新たな序文が追加されている。本発表でも最後に、序文等の記述とSTとTTテキスト比較の分析結果と合わせた考察を紹介する。

【参考文献】

【洋書】

- Baker, M. (2006). *Translation and conflict*. Routledge.
- Hachiya, M. (1955). *Hiroshima diary: the journal of a Japanese physician, August 6 - September 30, 1945* (W. Wells, Tran.). The University of North Carolina Press.
- Hatim, B. & Mason, I. (1990). *Discourse and the translator*. Longman.
- Hermans, T. (2007). *The conference of the tongues*. St. Jerome Pub.
- Martin, J. R. & White, P. R. R. (2005). *The language of evaluation: appraisal in English*. Palgrave Macmillan.
- Munday, J. (2012). *Evaluation in translation: critical points of translator decision-making*. Routledge.
- Spiessens, A. (2022). Translating the perpetrator's testimony: Kommandant in Auschwitz (Holocaust) and Une saison de machettes (Rwanda). In S. Deane-Cox & A. Spiessens (Eds.), *The Routledge handbook of translation and memory*. Routledge.
- Wang, B. & Munday, J. (2021). Introduction. In B. Wang & J. Munday (Eds.), *Advances in discourse analysis of translation and interpreting: linking linguistic approaches with socio-cultural interpretation*. Routledge.

【和書】

- 蜂谷道彦 (1953) 『広島原爆雑話』. 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3451909> (参照 2026-04-16)

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 10:40 – 11:10

A-7 司会: 藤濤文子

文学翻訳者のエージェンシーとフェミニズム

古川 弘子 (東北学院大学)

本発表の目的は、日本のフェミニズムにおける文学翻訳者のエージェンシーを探ることである。フェミニズムの思想や体験は、翻訳がなければ地球規模で広がることはなかった (Davis 2017: 112)。実際、個人の葛藤を掬い上げる多声的な海外の物語は、日本のフェミニズムの裾野を広げてきた。例えば、韓国小説『82 年生まれ、キム・ジヨン』(チョ, 斎藤訳 2018) は日本のフェミニズムを後押しし、裾野を大きく広げた (崔 2022: 173–176)。そこで本研究では、能動的に行使されるエージェンシーに注目をし、翻訳者のパラテキスト(訳者あとがき、訳者解説など)と翻訳者の著書や他の媒体での言説研究を行う。エージェンシーの中でも、「パラテキストに関するエージェンシー (paratextual agency)」と「テキスト外で行使されるエージェンシー (extratextual agency)」(Paloposki 2009: 191)の観点から定性的に分析をする。

分析対象は、斎藤真理子氏、くぼたのぞみ氏、小山内園子氏、宇野和美氏の4名である。この4名を選んだ理由は、テキスト内で個々の翻訳者が可視化される「テキストに関する可視化性 (textual visibility)」(Kaindl 2025: 40–41)が高いからである。上述書の翻訳者である斎藤真理子氏は、訳者あとがきで韓国(語)と日本(語)のジェンダー規範や社会制度などについて詳細な解説を行うほか、韓国フェミニズムを日本に紹介する活動を行っている(斎藤 2019 ほか)。くぼたのぞみ氏は、訳者あとがきの重要性についてのエッセイを書いたり(くぼた 2018)、アディーチェ作品の日本語版の書名決定について語ったりしている(くぼた 2017: 171)。社会福祉士でもある韓日翻訳者の小山内園子氏は、訳者あとがきに自身の体験を記したり、読者に直接語りかける文体を使用したりする。また、高齢女性の殺し屋の物語を翻訳した際には、自らの固定観念が最大の妨げであったと記した(小山内 2022: 261)。スペイン文学翻訳の第一人者である宇野和美氏は、スペイン語圏の女性作家の作品が日本で紹介される機会が少ないことを憂慮し、自らの翻訳で紹介する活動を行っている(宇野 2021: 156)。

本研究は、近年注目を集めている Translator Studies の試みである。発表者は、Translator Studies が日本の翻訳研究の可能性を広げるものだと捉え、JAITS 研究プロジェクトを行ったり、自身の研究に取り入れたりしてきている(古川 2025)。本発表は、翻訳研究のみならず日本のフェミニズムに複眼的な視点を提供することを目指すものである。

【主な参考文献】

崔誠姫 (2024)『女性たちの韓国近現代史』慶應義塾大学出版会。

Davis, K. (2017). “A Cross-disciplinary Roundtable on the Feminist Politics of Translation.” In *Feminist Translation Studies*, edited by O. Castro and E. Ergun. New York/London. Routledge. pp. 111–135.

古川弘子 (2025)「日本の Translator Studies の可能性を探る」『日本通訳翻訳研究』第 25 号: 169–191.

Kaindl, K. 2025. “Visibilities of Translation—Visibilities of Translators: Reflections on the Theoretical Foundations of an Opaque Concept.” In *Beyond the Translator’s Invisibility*, edited by P. J. Freeth and R. Treviño. Leuven: Leuven University Press. pp. 31–48.

Paloposki, O. 2009. “Limits of Freedom: Agency, Choice and Constraints in the Work of the Translator.” In *Agents of Translation*, edited by J. Milton and P. Bandia. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp. 189–208.

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 11:20 – 11:50

A-8 司会: 藤濤文子

翻訳か、剽窃か?: 山川菊栄の初期「訳述」活動をめぐる一考察
キャロライン・ノーマ(立教大学)

翻訳と剽窃をめぐる議論には、大きく分けて二つの論点がある。第一は、既存の翻訳をどの程度まで参照して新訳を作成すれば剽窃とみなされるかという、古典的な境界線の問題である。第二は、近年哲学者マイケル・ドーティ氏が提唱している「翻訳剽窃」の概念であり、これは他者の著作を翻訳し、自らの独創的な著作として出版する行為を指す。

本発表では、この後者の「翻訳剽窃」の概念を取り上げ、戦前のフェミニスト筆者・活動家である山川菊栄が、かつて同様の指摘を受けた事例を検証する。

1910年代の若き菊栄は、外国語文献の翻訳、あるいはそれに極めて近い内容を、出典を明示せずに自らのオリジナル論文であるかのように執筆することがしばしばあった。こうした手法は当時、菊栄のみならず多くの知識人が実践しており、翻訳とも創作論文とも異なる「訳述」という独自のスタイルとして受容されていた。しかし、その後の学術的規範の確立とともに、翻訳と論文は厳格に区別されるようになり、こうした「訳述」スタイルは姿を消していくこととなる。

戦後の菊栄研究において、この執筆手法が批判的に取り上げられることは少なかったが、同時代において全く批判がなかったわけではない。例えば1921年、鉄道院事務官で婦人問題にも精通していた石井満は、著書『婦人に味方して』の中で、山川の『現代生活と婦人』(1919年)所収の「米国と婦人参政権」を取り上げ、それがホーレス・ホルスター氏の『Woman Citizen』(1918年)の「材料の出所を明かにせず」「大マカな翻訳」を臆面もなく出したものであると痛烈に批判している。

本発表では、石井によるこの指摘の妥当性を検証するとともに、仮に指摘が正鵠を射ていた場合、菊栄の「訳述」を現代のドーティ氏的な意味での「翻訳剽窃」として断罪することが、当時の歴史的背景を鑑みた上で妥当な評価と言えるのかを検討したい。

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 13:00 – 14:10
A-9 A-10

「日本の Translator Studies 確立のための基盤研究プロジェクト」報告と可能性探究のオープンディスカッション

古川 弘子(東北学院大学)、北代 美和子(翻訳家)、齊藤 美野(順天堂大学)、長沼 美香子(青山学院大学)、尹 恵貞(中央大学)、澤田 晶子(関西大学 D)

本報告およびオープンディスカッションの目的は2つある。まず、JAITS 研究プロジェクト「日本の Translator Studies 確立のための基盤研究プロジェクト」初年度の活動報告を通して、Translator Studies の理論的側面を提示し、プロジェクトメンバー間で行った議論、メンバーが自らの研究に取り入れるための方法や課題を紹介することである。次に、大会会場で参加者の皆さまと自由な意見交換を行い、日本の Translator Studies 確立のための可能性と裾野を広げることである。そのために、前半部分(30分)では本研究プロジェクトの報告、後半部分(30分)では報告についての質疑応答と、会場全体でのオープンディスカッションを行う。

本プロジェクトでは、初年度には大きく3つの活動を行った。1点目は、Translator Studies の主要な先行研究の読書会(主に Chesterman 2009; Vassallo 2023)とメンバー間の意見交換である。2点目に、現在行われている Translator Studies の事例を検討した。具体的には、アイルランドで 2025 年 10 月に行われた国際学会(Human Translators in Focus: Exploring the Human Aspects of Japanese Literary Translation through a Sociological Lens, Trinity College Dublin)に現地参加をした澤田が、学会の様子や国内外の研究動向について情報共有をした。3点目に、インタビューの練習を行った。ここでは、インタビューを北代、インタビュアーをその他全員とし、インタビュー前の準備、インタビュー本番、インタビュー後の振り返りと一連の流れを経験した。特に振り返りの部分では、インタビュー側とインタビュアー側の両者の意見を集約することで、課題や懸念点、可能性が明確となった。前半部分の報告では、これらの活動を通して得られた気づきや、培った知見を、今後、各々の研究活動にどのように活かしたいと考えているのかを述べる。

プロジェクト報告をふまえて行う後半部分では、会場の皆さまとの活発なオープンディスカッションを行いたい。この場では、翻訳研究にとどまらず、通訳研究、言語教育研究、実務家養成研究、および実務家など、様々な関心を持つ方々との意見交換を目指す。日本の翻訳研究に Translator Studies を取り入れ、日本から研究成果を発信することを目標に掲げた研究プロジェクトではあるが、各会員の研究を深めたり、研究領域や可能性を広げたりする機会を提供することができればと願っている。

【参考文献】

Chesterman, A. (2009). The name and nature of translator studies. *Hermes: Journal of Language and Communication Studies*, 42, 13-21.

Vassallo, H. (2023). *Towards a feminist translator studies*. Routledge.

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 14:20 – 14:50

A-11 司会: 齊藤美野

AI時代の翻訳研究におけるスコポスの再定義について
藤濤 文子(神戸大学)

近年、機械翻訳(MT)の高度化と生成 AI の登場により、翻訳は大きな転換点を迎えている。翻訳概念、翻訳者の役割、そして翻訳研究の捉え直しが必要とされ、翻訳は人による創造性・文化力・倫理判断と機械による効率性を統合するハイブリッドな協働プロセスとして捉えられると指摘されている(Sun et al., 2025)。スコ-pos理論の観点からすれば、翻訳は目的に依存した行為であるが、一方、文章入力に対して即時に訳文を生成する MT は、目的をもった翻訳行為とは言えない。その両者の協働プロセスとしての翻訳において、スコ-posはどう位置づけられるであろうか。そうした問題意識のもと、本研究では翻訳の目的(スコ-pos)を鍵概念として、人間の目的を意識した判断が MT との協働においてどのような可能性と限界を持つかを探ることを目指す。

この目的のもと、二つの調査を行った。調査 1 では、大学生 40 名を対象に、10 名ずつの 4 グループに分け、グループ別にジャンル(フィクション/ノンフィクション)、MT の利用タイミング(事前利用/事後利用)、および翻訳目的の明示の有無といった条件を変えて、英日翻訳タスクを実施し、事後アンケートを通じて翻訳過程における目的意識の働きを調査した。MT には Google 翻訳および DeepL を用いた。調査 2 では、そのうち 10 名に対して半構造化インタビューを実施し、MT および生成 AI の利用実態、翻訳時の意思決定過程、ポストエディットの方略と質評価、さらにプロ翻訳者の訳文との比較に関するデータを収集した。詳しい調査データを整理し、分析結果を報告する。加えて、同一テキストを用いて、生成 AI に対してプロンプトでスコ-posを明示的に指示した場合、出力がどのように変化するかを検証し、それが人間翻訳における目的志向性とどのように異なるかについても考察する。これらの分析を通じて、人と機械の協働プロセスにおいてスコ-posが果たしうる役割と新たな位置づけについて検討する。

【参考文献】

Sun, Sanjun, Liu, K. and Moratto, R. (Eds.). (2025). *Translation Studies in the Age of Artificial Intelligence*. Routledge.

第2日(8月30日) A 会場(200(赤門総合研究棟 2F)) 15:00 – 15:30

A-12 司会: 齊藤美野

翻訳学の観点から見る『欧文反省雑誌』(明治 30–31)の日本表象
佐藤 美希(札幌大学)

『欧文反省雑誌』(*The Hansei Zasshi*)は、明治後半に刊行が相次いだ、日本人編纂による英文雑誌の一つである。京都の本願寺派の学生らが設立した「反省会」の機関誌『反省会雑誌』(明治 20 年創刊、25 年に『反省雑誌』に改称)を前身とし、そのいわば欧文版として刊行された『欧文反省雑誌』では明治 30(1897)～31(1898)年の 2 年間、24 巻にわたり、日本の仏教や歴史、美術・建築などの文化について海外へ発信することを目的として、すべての記事が英語またはロシア語で執筆されていた。『反省雑誌』はその後『中央公論』へと引き継がれていく。

本発表は、明治期の社会文化において「翻訳行為とは何か、何のために行い、何にどのような影響を及ぼしようと考えられてきたのか」を当時の翻訳書籍や雑誌記事を通して探る研究プロジェクトの一環として、『欧文反省雑誌』の英文記事を対象とした一つのケース・スタディを提示するものである。

同誌は、その記事の多くが日本の仏教や歴史、文化に関するものであるため、日本仏教史や仏教表象の観点からの先行研究はあるが、翻訳学の観点からのアプローチは十分に行われていない。掲載されている記事は特定の日本語テキストからの翻訳であると明記されてはいないため、日本語から翻訳されたのか、一から英語で執筆されたのかどうかは定かではない。しかし、当初から海外に向けた発信を目的としていたことや、当時の知識人や学者らが参画し、明治後半という時代に海外に発信するという意図などを鑑みると、同誌には一種の「文化の翻訳」とも言える側面が見出される。さらに、異文化伝達におけるイデオロギーや自己表象の政治性という、翻訳学における重要な主題も浮かび上がってくる。

そこで本発表では、『欧文反省雑誌』全 24 巻に掲載された英文記事を中心に、宣伝広告や当時の評価などのパラテキスト(エピテキスト)も参照しつつ分析する。当時の社会思潮や他の媒体などに見られる翻訳観などのコンテキストと関連付けることで、明治後半の翻訳観の包括的な分析につなげたい。

第2日(8月30日) A会場(200(赤門総合研究棟2F)) 15:40 – 16:10

A-13 司会: 齊藤美野

観光・通訳・翻訳の交差点:井上勤と Clifford Bax の日本旅行および漢詩英訳
連 子心(筑波大学 D 満期退学)

本研究は、翻訳者井上勤(1850–1928)が晩年に通訳案内士として活動した経緯を明らかにし、イギリス人の Clifford Bax(1886–1962)との出会い、および Bax による漢詩英訳集の成立を通して、明治後期の観光業における通訳案内士の文化媒介的役割を考察するものである。

井上勤は、明治前期から翻訳者として活動してきた人物である。しかし、明治政府を辞職して東京から神戸に移住した後、洋花の温室栽培を中心に外国人向けの事業を展開していたこと(宮崎, 1964, p.29)、さらに兵庫県の通訳試験を受け、これに合格したことが伝えられている(川島, 1933, p.33)。明治 20 年代以降、訪日外国人旅行者の受け入れを前提とした制度整備が進み、明治 30 年代には「案内業者取締規則」が各地方にも導入されていった。井上の通訳案内士としての活動は、こうした明治後期の外客誘致と観光業形成の流れのなかに位置づけられる。

明治 39 年、Bax は来日し、神戸で井上を通訳案内士として雇い、井上の案内で京都をめぐる。本研究では、Bax の旅行記 *Inland Far: A Book of Thoughts and Impressions*(1925)を基礎資料とし、*The Japan Times* に掲載された記事と照合しながら、この京都旅行の経緯を検証する。Bax は京都の旅において、古都特有の静謐さと精神性を繰り返し描写するだけでなく、井上と日本思想、宿命観、芸術、詩について対話を重ねている。さらに二人の話題は、俳句から漢詩、そしてその翻訳へと展開していく。

この出会いの成果として、Bax は 1910 年に英訳漢詩集 *Twenty Chinese Poems* をロンドンで刊行した。本詩集について、Arthur Waley は、後に自らがアジア諸言語を学ぶきっかけとなったものだとしている(De Gruchy, 2003, pp.167-168)。さらに 6 年後、Bax は漢詩 5 首を増補し、*Twenty-Five Chinese Poems*(1916)を刊行した。これらの詩集は、漢詩英訳史上看過できない作品であるにもかかわらず、中文学史においてほとんど注目されない存在にとどまっている(Yao, 2002, 32)。

本研究は、以上の検証と考察を通して、井上勤を西洋文学の翻訳者としてだけでなく、訪日外国人旅行者に日本および東洋文化を媒介した通訳案内士として捉え直す。さらに、井上と Bax の事例を、明治後期の観光業において通訳案内士が単に言語を訳す存在ではなく、旅行経験と文学翻訳を結びつける文化媒介者として機能しえたことを示す一事例として位置づける。

【参考文献】

- 運輸省鉄道総局業務局観光課編(1946)『日本ホテル略史』運輸省観光課。
川島禾舟(1934)「井上勤翁」『書物展望』4(4), pp.28-35。
真子和也(2016)「通訳案内士制度をめぐる動向」『調査と情報』, pp.1-14。
宮崎修二郎(1964)『神戸文学史夜話』天秤発行所。
John W. De Gruchy (2003). *Orienting Arthur Waley: Japonism, Orientalism, and the Creation of Japanese Literature in English*. University of Hawaii Press.
Steven G. Yao (2002). *Translation and the Languages of Modernism: Gender, Politics, Language*. New York: Palgrave Macmillan.

第1日(8月29日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 10:20 – 10:50

B-1 司会: 飯田奈美子

日中翻訳に見られる方言の指標性のシフトと言語イデオロギーの働き: アニメ『はたらく細胞』における方言対訳場面を例に

王 遠帆(大阪大学 D)

「役割語」(金水, 2003)という概念は、特定の言語表現が特定の人物像を構築できることを明らかにした。方言も役割語の一種としてみなされており、人物像構築の手段として言語実践の中で活用される場面が多くみられる。そこで、言語実践の一種としての翻訳に際し、方言をどのように処理すればいいかと方言の翻訳方法が盛んに議論されてきた。そのうち、方言を方言で訳す「方言対訳法」の限界や有効性を論じる研究が多いが、その多くは方言が持つ言及指示的機能に関する考察に留まっている。方言が持つ社会指標的機能を考察する研究の中でも、実際の受容場面に即して方言指標性のシフトを実証的かつ理論的に説明する試みや、方言対訳行為が触発する受容者の言語イデオロギーを捉えた研究は不十分である。

上述した現状を踏まえ、本研究では、アニメ『はたらく細胞』の方言対訳の場面を分析対象とし、そこで観察された社会指標的機能のシフトを実証的に考察する。次に、言語人類学の視点を導入し、受容者のメタ語用的言説を分析することで、言語イデオロギーが目標テキストで構築された人物像への受容者の理解に影響を与えていることを明らかにすることを目的とする。

本研究ではまずアンケート調査を行い、原作と翻訳版で視聴者が感じ取った方言話者の人物像を比較した。その結果、原作方言の指標性が一部捨象されながらも、新しいイメージが創出されたことが観察できた。次に、原文と訳文の対照分析を行ったところ、翻訳版では原作に存在しない表現が多く増補されていることが確認された。また、受容者のメタ語用的言説の分析から、目標テキストの人物像が中国東北方言話者に典型的とされる人物像と解釈されていることがわかった。そこで、受容側が受け取った人物像と原作の人物像との差異は、具体的な翻訳方法と、受容者が持つ中国東北方言の言語イデオロギーとの両方に影響されているといえるだろう。

本研究は、方言対訳法で方言の言及指示的意味と社会指標的意味の等価を同時に達成することの困難さを実証的に示した。また、翻訳実践における意味生成が翻訳操作のみならず、受容者側の言語イデオロギーとの相互作用によって成立することを明らかにした。そこで、翻訳研究に言語人類学の視点を導入することの有効性が示されたといえよう。

【参考文献】

金水敏(2003). ヴァーチャル日本語 役割語の謎. 岩波書店

第1日(8月29日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 11:00 – 11:30

B-2 司会: 飯田奈美子

日中翻訳における関係節処理: 統語層と意味層の「等価のずれ」をもたらす非明示的要因
大西 道子(関西学院大学 D)

日本語から中国語への翻訳において、扱いがとりわけ難しいとされる構文の一つが、関係節を中心とする連体修飾節である。中国語においても日本語と同様に[VP+N]型(前置修飾型)の関係節が存在するものの、その使用頻度は日本語の半数程度(Wang et al. 2009)であり、「直訳すると不自然になりやすい」ことが実務者の共通認識となっている。

発表者は、直訳・意識の判断を難しくする理由の一つが、二言語間の統語層と意味層との「等価のずれ」をもたらす要因が非明示的であり、その差を意識しにくいことにあると考える。本発表では、その具体例として、関係節における「名詞の指示」と「修飾語の種類」に着目する。

先行研究では、テキスト内の要素が起点言語(SL)と目標言語(TL)の一方で明示的で、他方で非明示的である場合に、TL側で加訳や減訳などの処理が必要なことがしばしば指摘されているが(Nida 1964: 228-229 など)、SL・TLの双方で非明示的な要素はあまり注目されていない。

名詞はその指示が「定」であるか、「不定」であるかによって振る舞いが大きく異なる。例えば、英語やフランス語などは冠詞で定・不定を明確に区別し、ロシア語は主語が定か不定かで文の語順が逆転する(Catford 1965: 28-29)。アラビア語の[N+A]フレーズは、名詞が定指示(冠詞あり、または固有名詞など)か不定指示かによって、名詞句(主要部+後置修飾語)か形容詞述語文(主語+述語)かの違いが生じる(師岡 2025: 119)。

冠詞を持たない日本語の母語話者は、定・不定指示の用法上の違いを意識しにくく、多くの場合は英語学習を通して初めて定・不定の概念を知る。中国語は指示詞や数量詞で定・不定の見分けがつく場合もあるが、冠詞相当物は存在しない。

上に挙げたいずれの言語においても、人名や人称代名詞には通常冠詞はつかず、定指示であることは明示されない。また日本語・中国語では限定修飾と非限定修飾との間に形式上の差がない。さらに、日中両言語では非限定関係節と主節の間にはしばしばロジック関係が生じるが(中国語では義務的: 孫 2021)、順接・逆接等の明示的なマーカーは使われない。

関係節の日中訳は、こうした非明示的な言語要素に着目すればその規則性を見出せる。大西(2026)の頻度集計結果は、SL・TL双方で非明示的な言語要素が意味層の非等価性をもたらすことを示唆しており、これは翻訳評価基準の作成においても参考となりうる。

【参考文献】

- 金水敏(1986a)「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
 金水敏(1986b)「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
 益岡隆志(1995)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
 師岡カリーマ・エルサムニー(2025)『これから始めるアラビア語入門』NHK出版
 Nida, E.A(1964/1972) *Toward A Science of Translating*. E.J.Brill, Liden, Netherland /成瀬
 武史訳『翻訳学序説』開文社出版
 Catford, J.C.(1965) *A Linguistic Theory of Translation*. Oxford University Press
 Luming Wang., Kaoru Horie., & Prashant Pardeshi. (2009). *Toward a Functional Typology of Noun Modifying Constructions in Japanese and Chinese*. Studies in Language Sciences, 8, 213-228
 方梅(2008) 由背景化触发的两种句法结构——主语零形反指和描写性关系从句《中国语文》2008年第4期(总第325期)
 孙海英(2021)《日汉关系从句比较研究》南开大学出版社
 大西道子(2026)《与日语定语从句相对应的汉语句式选择》(修士論文)

第1日(8月29日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 11:40 – 12:10

B-3 司会: 飯田奈美子

ポストエディット作業における日中産業翻訳者の訳文品質の自己評価
単 凱 (東京科学大学 D)、佐藤 礼子 (東京科学大学)

ポストエディット (Post editing, PE) の訳文品質管理に関しては、『機械翻訳ポストエディットガイドライン (Ver.1.0)』(アジア太平洋機械翻訳協会, 2025) に詳しく品質、コスト、納期の面で、機械翻訳 (Machine translation, MT) 処理から品質仕様策定、品質改善に至る全工程を体系化・標準化するものである。しかし、現場では、産業翻訳者が常に明示的な評価表に基づいて訳文を判断しているわけではない。翻訳者は PE 作業において、MT 出力や他者の訳文を確認し、修正の優先順位や品質水準を自ら判断している。本研究は、日中産業翻訳者が PE 実務において自らの訳文品質をどのように評価するかを明らかにする。

調査では、日中産業翻訳者 7 名 (A~G) を対象に、PE 時の品質判断プロセスと納品可否の基準について、半構造化インタビューを行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を用いて分析した結果、PE 作業における訳文品質の評価の観点は 4 つに分類された。

- ① ケアレスミスの排除：数字、固有名詞、漏訳、誤字などのエラーが存在しないことが最も基本的な基準として認識された。調査対象者はこの点を言語能力によるのではなく職業的責任の問題として認識していた (7 名全員)。
- ② 正確さの確認：専門用語が公式表記と一致しているか、論理構造が原文に対応しているか、原文の意味内容や事実関係に疑義がないかを基準として正確さを検証していた。特に MT 出力に対しては、用語の不統一や文脈に合わない語義選択を確認していた (7 名全員)。
- ③ 自然さの評価：テキストタイプに応じた文体の適切さ、接続表現や文末表現の自然さ、翻訳調が感じられないか、読者が違和感なく読み通せるかを基準として自然さを判断していた (A, B, C, D, E)。
- ④ 実務的条件による基準の変動：テキストの種類、クライアントの要求と納期に応じて、どの段階までの品質を追求するかがライト PE とフル PE の間で動的に調整されていた (C, D, E, F, G)。

日中産業翻訳者は PE 作業において、まず MT 出力を通読し、ケアレスミスがないことを確認した上で、MT 出力が原文に正確に対応しているかを基準に正確さを検証し、さらに訳文全体の自然さを通読で判断するという個人の経験に根ざした判断プロセスを実践していた。このプロセス全体は、実務的条件に応じて動的に調整されていた。本研究は、実務者の視点を記述することで、PE 品質管理に翻訳者側の判断を補完し、PE 教育における品質判断能力の育成に示唆を提供する。

【参考文献】

アジア太平洋機械翻訳協会 (2025) 『機械翻訳ポストエディットガイドライン (Ver.1.0)』。

第1日(8月29日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 13:30 – 14:00

B-5 司会: 山木戸浩子

Encoding Interpersonal Stance in Webtoon Translation: Korean Sentence-Final Expressions in Japanese and English Versions of *Lookism*
Vasilev Todor (Kobe University D)

This study examines the translation of Korean sentence-final expressions in the webtoon *Lookism* and their renderings in the Japanese and English versions, focusing on the encoding of interpersonal stance. Korean frequently grammaticalizes speaker attitude and interpersonal alignment through sentence-final endings such as *-잖아*, *-거 든*, *-냐*, and *-네*. However, the extent to which these pragmatic nuances can be preserved across languages differs according to the structural resources available in the target language. Previous studies have demonstrated the important role of sentence-final expressions in conveying modality and speaker attitude (Maynard 1993), while research on manga translation has emphasized the difficulty of transferring pragmatic nuance across languages (Kaindl 1999). Nevertheless, despite the global expansion of Korean webtoons, relatively little attention has been paid to the linguistic translation of webtoon dialogue itself, particularly within Japanese translation studies. Existing studies have also focused more heavily on cultural references, honorifics, and multimodal adaptation than on interpersonal stance.

The study analyzes approximately 120 instances of Korean sentence-final expressions extracted from selected episodes of *Lookism*. Each example is compared with its official Japanese and English translations and annotated according to two criteria:

- (1) the pragmatic function of the original Korean expression, including assertion, softening, reproach, shared knowledge marking, emotional emphasis, and explanatory stance; and
- (2) the translation strategy employed in the target language, such as grammatical equivalence, lexical compensation, pragmatic reformulation, or neutralization.

The analysis focuses on how interpersonal nuance is retained, weakened, or omitted during translation and on the differing mechanisms used by Japanese and English to convey speaker stance.

Particular attention is paid to the contrast between Korean and Japanese, both of which possess relatively rich systems for marking interpersonal nuance through sentence-final morphology and particles, and English, where such meanings are more frequently conveyed lexically or contextually. By approaching webtoon translation through the lens of interpersonal stance and cross-linguistic pragmatics, this study highlights the usefulness of webtoons as a linguistic corpus for translation research due to their dialogue-heavy structure and reliance on spoken interaction.

Kaindl, Klaus. 1999. "Thump, Whizz, Poom: A Framework for the Study of Comics under Translation." *Target* 11(2): 263–288.

Maynard, Senko K. 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Amsterdam: John Benjamins.

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 10:00 – 10:30

B-6 司会: 石原知英

医療通訳者養成における「心構え」講座の役割と限界—短期集中型研修における実践報告—
服部 しのぶ(鈴鹿医療科学大学)

医療通訳者の養成は、多くの場合、厚生労働省の「医療通訳育成カリキュラム基準」に準拠して行われている。同基準では、通訳理論・技術、倫理とコミュニケーション、医療通訳に必要な知識について、計 50 単位以上の体系的な学習が求められている。一方、実際の研修現場では、時間数が限られた中で養成を行う短期集中型研修も少なくない。そのため、限られた時間の中で何を優先的に扱うべきか、また各講座をどのように位置づけるかが課題となっている。

本発表は、短期集中型研修における計 280 分の「医療通訳者としての心構え」講座の実践報告である。医療通訳者は、単に言語を置き換えるだけではなく、患者と医療者の間で生じる文化的・心理的な差異にも向き合う必要がある。そのため、通訳技術の習得以前に、専門職としての立場や役割について考える機会が重要である。当該講座では、医療通訳の専門職性、行動規範、患者が置かれる非日常性、傾聴や非言語コミュニケーション、異文化理解などを扱った。また、高・低コンテクスト文化やカルチュラル・コンピテンスに触れるとともに、ケーススタディやペアワークをとおして、受講者が具体的な場面における通訳者の役割や対応について考察する機会を設けた。特にケーススタディでは、「どこまで介入すべきか」「患者と医療者の間でどのような立場を取るべきか」など、医療通訳者が実際に直面するかもしれない葛藤について受講者同士で検討を行った。

講座内容をカリキュラム基準と照合した結果、本講座は「倫理とコミュニケーション」領域の導入段階を担う科目として位置づけられる一方、通訳技術や医療知識については、他の科目との連携を前提とした限定的な扱いに留まっていた。しかし、短時間であっても、医療通訳者として何を基準に考えるのかを提示し、その後の知識・通訳技術学習を意味づける役割を担うことが示唆された。

本発表では、短期集中型養成における「心構え」講座の教育的意義と限界について整理し、限られた時間数の中で専門職教育をどのように構成するかについて意見交換を行いたい。

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 10:40 – 11:10

B-7 司会: 石原知英

通訳教育による学びと意識の変容:フォーカスグループ・インタビュー調査の予備的考察
新崎 隆子(NHK グローバルメディアサービス)、鶴田 知佳子(東京外国語大学)

本発表では、通訳教育についての質問紙調査と合わせて実施したフォーカスグループ・インタビューの暫定的な分析結果を報告する。大学や大学院で通訳教育を受けた人たちがその後の人生において、学んだことをどのように活かしたかに関する研究はあるが、内面的変容にまで踏み込んだものは見当たらない。通訳教育の意義を再考し将来のあり方について検討する目的で、東京外国語大学および大学院で通訳を学んだ人たちへの調査を行った。インタビュー調査の参加者は質問紙調査の回答者 37 人のうちの 5 人で、2 人は調査時に通訳実務者、3 人はそれ以外の職業についていた。

調査は対面式で行い、ZOOM によるビデオ録画を行った。所要時間はおよそ 80 分であった。冒頭に調査の主旨を「通訳教育を受けた経験がどのように自分の言語力、異文化理解、キャリア、成長に影響を与えたかを語ってほしい」と説明し、質問への答えというよりは自由に語り、参加者同士の質問やインターアクションもできることを確認した。

インタビューデータは、木下(2003)が提唱した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した。この手法は、質的データから直接概念やカテゴリーを生成することを可能にする。その結果、通訳教育の経験を説明する 4 つのカテゴリー、「通訳の価値を認識する」「自分の世界を広げる」「文化の仲介者としてのアイデンティティ」「人間的成長」が抽出された。これらのカテゴリーは、通訳教育には変容学習の側面があることを示している。MezirowはTransformative Learningには10の段階があると述べている(Kitchenham, 2008)が、その多くが回答者の経験と重なっている。通訳教育は学生に通訳の価値を認識させ、視野を広げ、異文化仲介者としてのアイデンティティを育み、人間的成長を促すものであると言える。

通訳教育は語学学習として優れた効果を上げることが、すでに複数の研究者によって報告されている。今回、フォーカスグループ・インタビュー調査を通じて、母語と外国語の間での橋渡しをする通訳には、外国語の習得だけでなく、認知的・情緒的な成長を促す教育的意義があるという示唆を得た。

【参考文献】

木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践:質的研究への誘い』弘文堂
Kitchenham, A. (2008). *The evolution of John Mezirow's transformative learning theory*.
Journal of Transformative Education, 6(2), 104–123.
<https://doi.org/10.1177/1541344608322678>

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 11:20 – 11:50

B-8 司会: 石原知英

「英語の達人」とされる通訳者の先人たちの学習方略(追跡調査) – 60 歳代の場合
内藤 稔(東京外国語大学)、高橋 絹子(関西大学)

本研究は、「英語の達人」とされる通訳者のいわゆる先人たちが、どのような学習方略を用いて、通訳ができるようになったのかということに関して実施している一連の調査の結果を報告するものである。竹内(2003)では、「英語の達人」の学習者を以下のように定義している。①日本で生まれていること、②12才以降に本格的な英語学習を開始していること、③主として日本で英語を学び、留学経験があるとしても時間的に遅く、豊富ではないこと、④家庭環境として英語の使用が日常的ではないこと、⑤現在は英語を使う仕事をしていること。このうち⑤の「英語を使う仕事」を「通訳者」に限定し、通訳者の英語学習を成功に導いた学習方略を探る。

先行研究では、すでに「英語の達人」とされる現在 70 歳代の通訳者を対象に実施したインタビューデータの分析の結果が発表されている(内藤・高橋 2025)。本研究では、対象者として「通訳者の先人」を 60 歳代の通訳者とした。先行研究の 70 歳代の結果によれば、通訳者以外の「英語の達人」と通訳者の間に見られた共通点として、「集中型の学習形態」(竹内 2003)が挙げられる。また差異は、リーディングの方略において見られた。通訳者以外の「英語の達人」は「大意を取りながら読む」という方略に対する言及がなかったと報告されている(竹内 2003)。この学習方略は、60 歳代にも同様の傾向が見られるのであろうか。または異なった学習方略があるのか。

本研究のインタビュー調査の結果は、学習方略は 70 歳代の通訳者とほぼ一致していた。例えば、「集中型の学習形態」や、膨大な量のペーパーバックを「大意を取りながら読む」などである。また大学を受験する段階で、特に文法力では、高い英語力を備えている点も共通していた。さらに仕事上での言語の経験が役に立っているということでも共通点が見られた。違いとしては、学ぶことが好きではあるものの、必ずしも言語学習や言語自体が好きであったというわけではなく、言語以外のことに関する新たなことへの探究心が通訳者としてのキャリアにつながっている場合もあったことである。

今後の課題としては、通訳者を目指す学習者がどのような学習方略を取っているのかを調査し、比較を行いたい。本研究が、今後通訳者を目指す学習者、並びに英語学習者の一助となることを期待する。

【参考文献】

竹内 理(2003)『よりよい外国語学習法を求めて』松柏社

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 13:00 – 13:30

B-9 司会: 朱藹琳

ホワイトハウス記者会見における通訳の不使用が談話の展開にもたらす影響: 高市・トランプ会見(2026年3月)とゼレンスキー・トランプ会見(2025年2月)の比較分析
田村 智子(国際基督教大学)

2026年3月に高市総理が米国の首都D.C.でトランプ大統領との日米首脳会談に臨んだ。2025年春から1年越しの懸案事項であったはずの関税交渉が、2026年2月末の米国とイスラエルによるイラン攻撃で、同盟国の日本が自国の法的枠内でどのような協力が可能・不可能かについての説得外交へと大きく転換し、ワシントンポスト紙に「walking tightrope(綱渡り)」(Lee & Tanaka, 2026)と称された訪米となった。それでも対米投資を手土産に、終始「charm(愛嬌)」を駆使し、大統領による真珠湾攻撃への言及の際も「held her tongue(何も言い返さず)」、「largely unscathed(ほぼ無傷)」で全日程を終了し、政府関係者も「成功裡に進み、成功裡に終わった」と評する会談になったと報じられた(Hernández, 2026; 『願望に訴え』, 2026)。しかし3月19日に記者団を交えて行われたホワイトハウス執務室での約27分的首脳会見で、開始12分後に高市総理自らがトランプ大統領に「日本語への通訳は必要ない」と伝えたため、以降最後の質疑応答以外の全会見が英語で進んでしまったことが、この会見にどのような影響を及ぼしたかの分析はなされていない。総理も、同行した2名の大臣も、米国での留学や勤務経験はあるものの、簡単な会話以外の正式な交渉では常に通訳を使用している(高橋・木村, 2018, を参照)。にもかかわらずこの会見が英語でのみとなった結果、米国人記者からの質問を含めた会見全体の流れや談話の内容は、英語母語者であるトランプ大統領と非母語者である日本政府側との言語的力関係(Liddicoat, 2016; Neeley, 2013)も相まって、実際はどのような展開になったのか。類似の例として、2025年2月にゼレンスキー大統領が通訳を交えずにトランプ大統領と行った記者会見があるが、その会見中に激しい言い争いが起きてしまった大きな要因として、通訳の不使用が指摘された(Fan, 2025)。本発表では、2026年3月の高市・トランプ記者会見を2025年2月のゼレンスキー・トランプ記者会見と比較しながら、首脳会談という最重要場面において通訳を使用しないという選択が談話の展開に及ぼす影響に関して、発話回数や発話量、そしてトピックの主導権・支配権掌握の観点から談話分析を行う。

【引用文献】

- Fan, D. C. (2025, March 2). When diplomacy breaks down: The interpreter who wasn't used. <https://damienfan.medium.com/when-diplomacy-breaks-down-the-interpreter-who-wasnt-used-759b80f117da>
- Hernández, J. C. (2026, March 20). Using charm and restraint, Japan's leader mostly avoids Trump's wrath: News analysis. *The New York Times Online*.
- Lee, M. Y. H., & Tanaka, C. (2026, March 18). Japan's leader heads to D.C. bearing gifts of peace for a president at war. *The Washington Post*.
- Liddicoat, A. J. (2016). Native and non-native speaker identities in interaction: trajectories of power. *Applied Linguistics Review*, 7(4), 409–429.
- Neeley, T. B. (2013). Language matters: Status loss and achieved status distinctions in global organizations. *Organization Science*, 24(2), 476–497.
- 『願望に訴え』『ごますり巧み』海外報道: 日米首脳会談(2026, 3月21日)『朝日新聞』
- 高橋絹子・木村護郎クリストフ(2018)「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか?: 日英ビジネス通訳の事例から」『通訳翻訳研究への招待』第19号: 91–108.

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 13:40 – 14:10

B-10 司会: 朱藹琳

外国にルーツをもつ子どもとその家族への支援とコミュニティ通訳の位置づけ: 当事者性による認識の差異に着目して

佐藤 晶子(京都外国語大学)、河野 弘美(京都外国語短期大学)、稲垣 勉(京都外国語大学)、グリゴリー・ミソチコ(京都外国語大学)

外国にルーツをもつ子どもが、家族のために通訳を担う事例は、在日外国人児童の増加にともない広く見受けられる。本稿はこれを「子ども通訳」と呼び、ヤングケアラー研究の系譜のなかに位置づけ直したうえで、職業的なコミュニティ通訳の制度設計と養成へどう接続するかを論じる。義務教育が外国籍児童に課されない日本の制度下では、自治体窓口・診療場面・家族内での言語の橋渡しは、年少の家族成員に委ねられることがある。こうした子どもは「hidden carer(隠れたケアラー)」にあたるが、教育・福祉・通訳のいずれの領域からも、その姿は十分に光を当てられてこなかった。先行調査(ロハス エスピノーサ, 2024, pp.245-246)も、家族の側に依存性や精神面の困難がある場合、子どもに複合的な負荷がかかる可能性を示している。

本発表の資料は、外国語大学で「コミュニティ通訳」関連授業を履修する学部生 43 名による自由記述である。自由記述を整理した結果、三点が浮かび上がった。第一に、行政書類や親族間のやりとりで通訳を任された経験が複数語られ、聞き手の学生は「子どもの肩にのしかかる重さ」と表現していた。第二に、通訳支援が求められる場面として、医療現場(13/43)、自治体窓口(21/43)、面談(16/43)、学校生活全般(29/43)が頻出した。第三に、ご自身の経験の有無に関わらず、多くが通訳を「単なる言い換え」ではなく「文化を橋渡す営み」と受けとめ、コミュニティ通訳の制度的配置への支持が確認された。

本発表は、子どもが担ってきた言語面・文化面・心理面での橋渡しの働きを可視化する意義を確認し、医療・自治体・教育の各場面における専門通訳の配置と、当事者性の幅をふまえた養成課程の整備を論じる。なお、本研究は著者らの所属機関の倫理審査を受けている。

【参考文献】

ロハス エスピノーサ ロレーナ ス(2024)「子ども期における外国語通訳経験の長期的影響—日本で育った外国人に対するインタビュー調査と考察—」『人間文化研究』第 42 号(名古屋市立大学大学院人間文化研究科), 233-247.

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 14:20 – 14:50

B-11 司会: 田村智子

医療通訳における文脈負荷の記述:インドネシア語パイロット調査の設計と結果
岩田 晶子(東京外国語大学 D)

通訳研究では、語用論的負荷や認知負荷の観点から通訳者の困難が論じられてきた。しかし、通訳者もまた社会文化的文脈に埋め込まれた主体であり(Angelelli, 2008)、こうした枠組みだけでは説明しきれない困難が医療通訳では生じうる。発表者自身も、会議通訳と医療通訳で認知的疲労の質が異なることに長年気づいてきた。この感覚は、既存の枠組みでは説明されない負荷の存在を示唆している。

本パイロット調査に先立ち、発表者は医療現場の場面を示した動機付け教材を参加者に配布した。具体例を挙げる。一つは、インドネシア人患者が病院食を「辛くないので食べられない」と述べた際、通訳者が *tidak pedas* (「スパイシーな辛さ」がない) を *kurang asin* (「塩気」が足りない) と訳した場面である。もう一つは、「熱っぽい、のどの痛み、口内炎、だるい」など複数の症状を含む *panas dalam* のように意味範囲が広い表現は、通訳者がその概念自体を十分理解できず、結果として省略されることがある。これは、必要な情報が医療者に伝わらないリスクがある、という事例である。いずれも、患者の身体観・病気観に根ざした語彙が通訳者に処理困難をもたらす構造を示しており、単なる語学力不足では説明しきれない。

こうした負荷の実態を記述するため、インドネシア語話者を対象にパイロット調査を実施した。医療・身体・宗教・制度に関わる語彙・表現 30 項目を選定し、「説明のしにくさ」を具体性 (concreteness) の測定に用いられる 7 件法スケール (Paivio et al., 1968; Brysbaert et al., 2014) に準拠した質問票を用いた評定調査、および談話の録音・分析を行った。

本発表では、本パイロット調査の設計と結果を報告するとともに、今後実施する本調査に向けた分析の方向性を示す。具体的には、評定結果を統計処理ソフト(R)で可視化し、分布の偏りや二峰性の有無 (Levshina, 2015) を含めて語彙別の傾向を探索的に記述する。また談話分析によって、それらがどのような語りによって説明されるのかを記述する。

本発表を通じて、患者の身体観・病気観・宗教観・制度理解などの背景知識に由来する負荷を暫定的に「文脈負荷」と呼び、その記述可能性を検討する。

【参考文献】

- Angelelli, C. V. (2008). *Medical Interpreting and Cross-cultural Communication*. Cambridge University Press.
- Brysbaert, M., Warriner, A. B., & Kuperman, V. (2014). Concreteness ratings for 40 thousand generally known English word lemmas. *Behavior Research Methods*, 46, 904-911.
- Levshina, N. (2015). *How to do linguistics with R*. Amsterdam: John Benjamins.
- Paivio, A., Yuille, J. C., & Madigan, S. A. (1968). Concreteness, imagery, and meaningfulness values for 925 nouns. *Journal of Experimental Psychology*, 76, 1-25.

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 15:00 – 15:30

B-12 司会: 田村智子

ボランティア通訳者を介した医療相談通訳の相互行為分析:通訳者の参与枠組みからの考察
森元 亜紀子(神戸市外国語大学 D)

医療現場におけるボランティア通訳は時に否定的に捉えられる。Bolden(2000)は通訳者が医師、患者と直接話し、発話も要約する構造を「媒介される相互行為」とし、その弊害を指摘した。具体的には 1) 通訳者が医師の情報に追加する、2) 「～はこう言っています」と三人称で訳出する(Hale, 2007)。多くは未訓練のボランティアによる通訳行為とされる(Angelelli, 2004)。こうした訳出はどのようなプロセスで生じるのか。本発表ではボランティア通訳者による医療相談の訳出の特徴(伝聞形式や補足説明)を抽出し、生起プロセスを検証することで、通訳者がどのような聞き手・話し手として参与するかを明らかにする。

分析には参与枠組みの概念を用いる。先行研究では通訳者の話し手役割は「フッティング」(Goffman, 1981)を用いて分析されてきた(Wadensjö, 1998; 吉田, 2008などを参照)。一方、聞き手役割はあまり注目されてこなかった。話し手同様、相互行為の聞き手も多面的であると語用論分野で指摘されている(Haugh, 2013; 山口, 2018)。そこで本研究はHaugh(2013)の聞き手役割の分類も参照する。分析対象は、ある団体のボランティア通訳者、外国人相談者、医師の相談場面をシミュレーションし録画して得たデータである。

分析の結果、医師が訳出に介入したり、相談者が通訳者に質問することで通訳者の本来の聞き手役割 unaddressed recipient を addressed recipient (Goffman, 1981)に変容させ、通訳者自身も単なる recipient から「自身の理解を構築する聞き手 interpreter」(Haugh, 2013)となった。話し手役割も、医師に報告する、相談者に補足説明するなど本来の animator から author/principal に変容した。要通訳者の振る舞いが意図せず通訳者の役割を変容させたことから、要通訳者が抱く通訳者像と本来の役割のズレが通訳者の実際の役割に影響を与えることが分かった。

通訳者の行為は自身の資質だけではなく、参与者全員との関係性の中で構築されると言える。こうした事象は頻繁に起こり得ることであり、ボランティアによる「逸脱」と批判するのではなく、通訳実践の一例とし再評価することで、通訳者の役割の多様性を明らかにできると考える。

【参考文献】

- Angelelli, C (2004). *Medical Interpreting and Cross-cultural Communication*. Cambridge: Cambridge University Press
- Bolden, Galina. (2000). Toward Understanding Practices of Medical Interpreting: Interpreters' Involvement in History Taking. *Discourse Studies* 2(4): 387-419.
- Haugh, M (2013) Um/politeness, social practice and the participation order. *Journal of Pragmatics*, 58: 52-72.
- Goffman, E (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hale, S. (2007). *Community interpreting research and practice in applied linguistics*. New York: Palgrave Macmillan
- Wadensjö, C. (1998). *Interpreting as interaction*. New York: Longman
- 吉田理加 (2008). 「法廷通訳人のフッティングー模擬法廷データ談話分析ー」『通訳翻訳研究』第 8 号: 113-131. 日本通訳翻訳学会
- 山口征孝 (2018). 「聞き手の参与枠組み再考 聞き手役割のモデル化の有用性」 村田和代(編)『聞き手行動のコミュニケーション学』(pp. 33-57) ひつじ書房

第2日(8月30日) B会場(158(教育学部棟 1F)) 15:40 – 16:10

B-13 司会: 田村智子

会話の協働構築への働き「詳細質問」についての考察: 母子保健場面の対話通訳コミュニケーションの会話分析

飯田 奈美子(関西大学)

母子保健場面の会話において、保健師質問－母親応答－保健師助言という連鎖構造を用いて、保健師が段階的に質問をすることでアドバイスを行うことが示されている(Heritage and Sefi 1992)。このような連鎖構造における通訳を介した会話において、通訳者が自らの発話位置を用いて行っている行為について明らかにされていない。そこで、本研究では助産師外来における通訳を介した会話場面において、妊婦・家族の発話後の訳出の位置で通訳者が発話者(妊婦・家族)に対して行う質問を抽出して分析し、どのような作用があるかを明らかにする。焦点化する現象は発表者が「詳細質問」と名付けた行為で、これは通訳者が訳出できる位置で前の発話の聞き取り・内容を理解しているが、その発話内容ではその場で期待される形式の応答ではないため、前の発話者に質問を行うことである。

研究方法は、助産師外来における助産師と妊婦・家族との会話を通訳者が通訳をしている場면을録音録画し、会話分析にて分析を行った。

期待される形式の応答ではない時、助産師の質問が事実確認のために行われる場合(傾きがない)は「詳細質問」はされていないことが観察された。通訳者は質問形式に変更を与えず、助産師の発話内容を繰り返すことで期待される形式の応答をひきだしていた。そして、助産師の質問に傾きがある場合に詳細質問が観察された。助産師の質問に傾きがある場合、妊婦から助産師の傾きに沿わない応答がかえって来た時に、通訳者が詳細質問を行い、傾きに沿わない応答のアカウントを求めるというものである。

上記の分析結果を2つの事例を挙げて説明する。事例1では、助産師は「最適化の原則」(Boyd&Heritage2006)に従って質問を構築し、通訳者はそれにそった質問を形成している。そして妊婦が否定応答をしたときに「詳細質問」を行い、期待される形式の応答を引き出す行為である。事例2では問診票で病院方針とは異なる授乳方法(混合)を希望している妊婦に、その理由を問う質問が助産師からされたが、通訳者は直接的に理由を聞く質問を構築せず、まずは混合を希望しているかの確認を行う。助産師の傾きに沿わない理由を、通訳者が「詳細質問」を行い期待される形式の応答を引き出すのであった。これらの通訳者による「詳細質問」がなされることで、助産師外来の目的をどのように達成させ、助産師－妊婦・家族の関係性を構築しているかを考察する。

【参考文献】

- Boyd,E.and Heritage,J. (2006) Taking the history: questioning during comprehensive history-taking. *Communication in Medical Care Interaction between Primary Care Physicians and Patients*. Ed. Heritage,J. Maynard,D.W. Cambridge University Press.
- Heritage, J., & Sefi, S. (1992). Dilemmas of Advice: Aspects of the Delivery and Reception of Advice in Interactions between Health Visitors and First Time Mothers. In P. Drew, & J. Heritage (Eds.), *Talk at Work* (pp. 359-419). Cambridge: Cambridge University Press.

第1日(8月29日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))10:20 – 10:50

C-1 司会: 長沼美香子

通訳技術の汎用性を考える: 東京大学での講師経験より

賀来 華子(東京大学教養学部英語コース 非常勤講師・日英会議通訳者)

2012 年秋に東京大学のグローバル化を目的に発足した教養学部英語コース PEAK (Programs in English at Komaba)に 2016 年度に非常勤講師として採用され、英語と日本語をいずれも母語・準母語レベルで運用できる学生を対象に日英通訳技術の指導を重ねてきた。通訳業を職業の選択肢とはせず、通訳技術をあくまでも言語運用能力を向上させる手段と捉える履修生を中心に据えた授業作りをするにあたって、自ずと通訳技術の汎用性、その抽象化の可能性を考え続けて 10 年目となる。

PEAK は「2012 年度の発足当時から平均出願数が 280 人で推移」(東京大学新聞 2026.5.12 発行)しており、同プログラム固有の合格水準をクリアして入学する学生の多くは日本国籍者であった。通訳技術を履修する学生も当初は、保護者の少なくとも片方が日本語を母語とする家庭の一員として海外で育ち、日本語を継承語として身につけてきた学生の数が顕著であった。しかし、2021 年度以降は外国籍の合格数が最多あるいは日本国籍者と同数(東京大学新聞 2026.5.12 発行)になり、当該コースの履修生のプロフィールもその頃から多様化している。学校教育を通して一定の年齢から日本語を学び始めた学生の数も増加、それに伴い、履修生の間での日本語運用能力の開きも顕著となり、コロナ禍も相まって一層、授業計画に工夫を要することになった。

学生のニーズ、背景や言語運用レベルを念頭に、単なる技能訓練に留まらない授業にするために、文脈の重みや話し言葉の特異性などを学生が実感できるよう、授業内での実技や提出物としての課題をこの 10 年近くで発展させてきた。30 年近く日英会議通訳者として現場経験から得た示唆とともに、東京大学フューチャーファカルティプログラム(東大 FFP)で学んだインタラクティブ・ティーチングの技法を活用するよう努めてきたが、振り返ってみれば、授業の進化に何より大きく貢献したのは学生との相互作用である。

通訳技術の指導方法の一つのあり方として共有し、また今後の糧とさせていただきたい。

[参考文献]

月刊 東京大学新聞 第 3027 号「PEAK 最後の合格発表 出願者数が過去最多を更新」 2026 年 5 月 12 日発行

第1日(8月29日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))11:00 – 11:30

C-2 司会: 長沼美香子

翻訳に関する ISO 国際規格の高等教育への活用: 専門性と資格の枠組みから
佐藤 晶子(京都外国語大学)、アイシュワリヤ・スガンディ(京都外国語大学)、パッラヴィ・バツテ(京都大学)

本発表は、翻訳に関する 4 つの国際規格(『ISO 17100:2015』、『ISO 18587:2017』、『ISO 5060:2024』、『ISO 11669:2024』)が定める専門性と資格の枠組みを、日本の高等教育における翻訳者育成にいかに応用するかを論じることを目的とする。発表者らは京都外国語大学のコミュニティ通訳者育成プログラム(2024 年 4 月開設)の運営経験と、2025 年 6 月に同大学で開催した国際シンポジウム「ISO 国際規格を高等教育にどう活かすか」での議論を踏まえ、ISO 国際規格が大学カリキュラム設計の共通の枠組として機能しうることが提示される。

『ISO 17100:2015』は、翻訳者に求められる 6 つのコンピテンシー(翻訳、言語、調査、異文化理解、技術、専門分野)と資格取得経路を規定する基幹規格であり、『JIS Y 17100:2021』として国内規格化されている。『ISO 18587:2017』はポストエディターのコンピテンシーを定め、フル/ライトの 2 段階のポストエディットを区別する。『ISO 11669:2024』は翻訳プロジェクトのライフサイクルを 4 段階に整理し、コンテンツ、プロセス、その他の 3 領域のプロジェクト・パラメータを体系化する。『ISO 5060:2024』はエラー分類体系と評価者の資格要件を提示し、評価ルーブリック設計の国際的基盤を提供する。

発表では、上記 4 規格が相互補完的に翻訳の品質保証エコシステムを形成することを示し、4 つの応用領域を提案する。すなわち、(1)コンピテンシー基盤の学習成果定義(ISO 17100)、(2)プロジェクト管理リテラシー教育(ISO 11669)、(3)分析的評価ルーブリック設計(ISO 5060)、(4)批判的 MT リテラシーとポストエディット教育(ISO 18587)である。あわせて、国際規格の購入費負担、規制的文体の教育的読解、認証評価機関基準との整合という制度的課題への対応策を論じる。

本発表は、ISO 国際規格が単なる業界規制ではなく、カリキュラム設計・学習成果記述・品質保証のための国際的に共有可能な語彙として機能することを論じ、日本の翻訳者・通訳者養成における学術と職業の接点構築への寄与について会場の皆様と検討したい。

【参考文献】

- 日本規格協会 (2021)『JIS Y 17100:2021 翻訳サービス—翻訳サービスに関する要求事項』東京: 日本規格協会.
- 佐藤晶子・スガンディ, A.・バツテ, P. (2026)「ISO 国際規格を高等教育にどう活かすか—研究会・ワークショップ開催を踏まえた考察—」『国際言語文化』第 10 号, pp.67-77, 京都外国語大学国際言語文化学会.
- International Organization for Standardization (2015) ISO 17100:2015 Translation services — Requirements for translation services. Geneva: ISO.
- International Organization for Standardization (2017) ISO 18587:2017 Translation services — Post-editing of machine translation output — Requirements. Geneva: ISO.

第1日(8月29日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))11:40 – 12:10

C-3 司会: 長沼美香子

多様化するビジネス場面における通訳者の現状
高橋 絹子(関西大学)

本研究は、2021 年より経年で行っているビジネス場面における通訳者の稼働状況に関する調査の一環である。2020 年に世界中がコロナ禍に見舞われた際、通訳者の稼働状況がどうなっているのかという疑問から調査を開始し、経年でビジネス場面における通訳者の稼働状況に関して、インタビューの手法で調査を行ってきた(高橋 2022, 2023, 2024)。

本発表では、もっとも最近の調査である 2026 年 2 月に実施したインタビュー調査の結果を分析し、ビジネス場面における通訳者の稼働状況の推移を報告する。

具体的には、9 人の通訳者に通訳案件の件数の推移、通訳の手法の種類、案件の分野、AI の影響に関して、半構造化インタビューの形式でたずねた。その結果、通訳案件の推移に関しては、9 人全員が、案件数が多く、「大変忙しい状況」であると回答している。そして 2023 年から、この状況はほぼ変わっていないと答えている。ただしこれ以外の質問に関しては、ばらつきが見られた。例えば、手法に関して、通訳現場で、パソコンや同時通訳の機械などに端末を接続し、話者の発言を書き起こす手法の事例に関して、「ほとんどの通訳者がそのような端末を利用している」という報告があった一方で、存在も知らない通訳者もいた。またこうした端末の利用に関しても、賛否両論の意見が報告された。さらに手法に関しても、オンライン通訳が多い通訳者と対面通訳が多い通訳者が存在した。特にいずれかを選択しているわけではないという。また逐次通訳が増えてきているという報告と、同時通訳が依然多いという報告もあった。さらに先行研究では、調査を行った通訳者の主な通訳の分野が、ほぼ「金融、製薬、IT」に集約されていたが(木村・高橋 2019)、多様な分野が登場してきている。AI の利用に関しても、あまり影響を感じていない通訳者がいる一方で、AI のために案件がキャンセルになったこともあるという報告もあった。

本研究の調査の結果では、以上のように、ビジネス場面の状況が多様化してきており、通訳者の稼働の傾向がわかりづらくなってきているということが判明した。ただ通訳案件が減っていることは無いと言えよう。またインタビューの分析結果からは、臨機応変に多様な状況に対応できることが、通訳力と同様に求められると考えられる。このような結果を教育や研究に反映するためにも、この先も同様の調査を継続する必要があるであろう。

第1日(8月29日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))13:30 – 14:00

C-4 司会: 篠原有子

アニメーション映画におけるオラリティと人物像の関連: 日本語吹き替え版における役割語とアーキタイプの共生関係に関して

Laura Gómez Pérez (神戸大学 D)

役割語とは、2000年代前半に初めて金水敏により提唱された概念であり、フィクション作品の中で特定の人物像を想起させる言葉遣いを指す(金水, 2003)。役割語は、現実世界においてあまり使用されない、戯画化され誇張された話し方である。しかし、フィクション作品の中で反復的に登場するキャラクター像を理解する際に役割語が使われることがあり、その理解には受け手が共有する知識が活用される。すなわち、特定の社会においてのみ理解できる社会的ステレオタイプに基づいて成立したものである点で、役割語は強い文化的・社会的含意に縛られているといえよう。

役割語は分析対象として、近年ますます翻訳研究の分野から注目を集めており、日本語を原文として外国語に翻訳する過程において、役割語の扱いが主に研究されてきた(福畠, 2012; 山木戸, 2018)。一方で、日本語への翻訳において、役割語の追加がどのように視聴者の解釈を変化させるかを考察する論文は少ない。本研究は、そうした先行研究のギャップを補完することを目指す。

本研究では、90年代～2010年に上映された6本のディズニーアニメーション映画を基にして、日本語吹き替え版の役割語とアーキタイプ(cfr. Vogler, 1998/ 2007)の関係に関する調査を行った。まず、*Shadow* アーキタイプ(悪役)に注目し、英語原作において登場人物の〈男性性〉、〈女性性〉、〈アクセント〉、〈外見〉について分析した。その上で、日本語吹き替え版の役割語の使用量を量的分析・質的分析の観点から検討した。この分析にもとづき、悪役のセリフを翻訳するにあたり、原作の登場人物のどのような特性が役割語の選択を左右するか、そして登場人物の性別や背景に関係なく *Shadow* アーキタイプに共通した役割語や言語パターンが存在するのかを論じる。

研究の結果として、*Shadow* アーキタイプに分類された登場人物は役割語度の低い言葉遣いを利用しており、原作の登場人物の特徴を反映、そして、場合によっては強調する働きを持つと考えられる。なお、登場人物の性別を問わず、日本語吹き替え版において全員が多少男性的に描かれる傾向が見られるといえる。

【参考文献】

福畠 教隆 (2012)「スペイン語の『役割語』—日本語との対照研究—」*Clavel* 第2号: 70-86.

金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 岩波書店.

Vogler, C. (1998[2007]) *The Writer's Journey: Mythic Structure for Writers*. Michael Wiese Productions.

山木戸浩子 (2018)「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」『通訳翻訳研究への招待』第19号: 1-21. 日本通訳翻訳学会.

第1日(8月29日) C 会場(109+159(教育学部棟 1F))14:10 – 14:40

C-5 司会: 篠原有子

『モアナと伝説の海』における字幕翻訳分析: 映画を活用した英語教育への示唆
上田 悠莉 (武庫川女子大学 D)

字幕翻訳では、時間的・空間的制約の中で、情報の圧縮や表現の調整が行われるため、音声と字幕の間には差異が生じる。また、その差異には技術的制約だけでなく、文化的・社会的要因も影響していると考えられる。特に、英語映画の日本語字幕には、原文に存在しない女性語表現が付加される場合があり、「わ」「よ」などの使用によって、人物像が変化する可能性を指摘している(中村, 2012)。一方、古川(2014)は女性語を日本社会のジェンダー・イデオロギーと結びつけた規範的表現として論じている。しかし、字幕翻訳において女性語がどのような機能を持って使用されているかについては、十分に検討されていない。

そこで本研究では、ディズニー映画『モアナと伝説の海』(2016)を対象に、英語音声と日本語字幕を比較分析し、翻訳戦略とジェンダー表現の特徴を検討した。具体的には、Gottlieb(1992)の字幕翻訳戦略を用いて字幕全体を分類するとともに、主人公モアナの発話を収集し、日本語字幕における女性語的特徴を分析した。さらに、女性語表現を語用論的機能の観点から分類し、その使用場面との関連を検討した。

本研究では、以下の3点を研究課題として設定した。

- 1) 英語のセリフと日本語字幕の比較を通して、どのような翻訳上の特徴が見られるのか。
- 2) モアナの発話では、どのようなジェンダー表現が見られるのか。
- 3) 字幕翻訳は英語学習においてどのような役割を果たし、どのように教材として活用することができるのか。

分析の結果、字幕翻訳では原文の意味を保持しつつ情報量の調整が行われていることが明らかとなった。また、日本語字幕では、「わ」「よ」などの女性語が付加されていた。しかし、こうしたジェンダー表現に関わる翻訳は、Gottlieb(1992)の字幕翻訳戦略では十分に説明できない。そのため、本研究では女性語の付加を「拡張(Expansion)」を発展させた「女性語による拡張」として捉える可能性を検討した。さらに、日本語字幕における女性語は、固定的な女性らしさを示すものではなく、感情の強調や対人関係の調整など、場面に応じた語用論的機能を担っていた。

以上により、本研究では、映画の字幕翻訳における音声と日本語字幕の差異が、単なる意味内容の移行ではなく、文脈に応じた意味の再構築として行われていることを示した。さらに、字幕翻訳の分析は、翻訳における表現の選択や言語の社会的意味への理解を深める教材としても活用できる可能性がある。

【参考文献】

- 古川弘子 (2014). 「西洋と日本のフェミニズム翻訳」『翻訳研究への招待』12巻: 21–37.
- Gottlieb, H. (1992). Subtitling: A new university discipline. In C. Dollerup & A. Lindegaard (Eds.), *Teaching translation and interpreting: Training, talent and experience* (pp. 161–170). John Benjamins.
- ジョン・マスカー・ロン・クレメンツ監督 (2016). 『モアナと伝説の海』[DVD], ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン.
- 中村桃子 (2012). 「白人ヒロインが変化させる女ことば—70年代のアメリカ映画字幕に見る—」『関東学院大学経済系』第252集: 1–17.

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))10:00 – 10:30

C-6 司会: 野原佳代子

多言語辞書データにおける防災用語の日中翻訳の再検討
楊 潔氷(福山大学)、徐 芳芳(浙江理工大学)

2026年5月29日より新たな防災気象情報の運用が開始され、災害関連情報には警戒レベルの数字が付与されるとともに、色分けによる危険度の把握も可能となった。在留外国人の増加に伴い、防災気象情報や学校の「災害危険時の授業対応マニュアル」の多言語化も進められている。一方、AIや機械翻訳技術の発展により翻訳精度は向上しているものの、防災用語のように文化的・制度的背景を含む表現は必ずしも適切に翻訳されるとは限らない。専門用語の翻訳は借用等の直接的翻訳方略が多用されている。日本語と中国語はともに漢字を使用する一方、語義や語順に差異があるため、直接的翻訳方略によって誤解を招く場合がある。よって、本研究は災害関係用語に焦点を当て、国土交通省気象庁が公開した多言語辞書データにおける中国語訳を分析し、防災用語の翻訳方略や改善案を吟味することを目的とする。

多言語辞書データには「用語」、「情報文」、「対応行動」の3種類(計7279項目)が収録されている(2026年5月29日現在)。具体的には、地震、台風、大雨、津波、火山、警報等に関する用語を抽出し、中国語訳を分析した。この基準をもとに分析したところ、一部の用語に語義のずれや不自然な表現が確認され、改善の必要性を見出した。事例を表1に示し改善案を提示する。

表1 日本語と中国語訳の対照表

通し番号	起点言語(日本語)	目標言語(中国語)	改善案
12	警戒レベル相当情報	警戒等级相当信息	相当于警戒等级的信息
17	参考となる警戒レベル	参考用警戒等级	用于参考的警戒等级
43	雷注意報	闪电注意报	雷电预警/雷电注意报+注釈
52	今後の推移	今后的推测	今后天气变化情况
93	副振動	二次振动	假潮
199	北北東	北北东	东北偏北
571	噴火	喷火	火山喷发/火山爆发
751	震度5弱以上	烈度5弱以上	烈度4.5以上

誤訳と判断された一例として43の「雷」を取り上げる。また、日本では5段階の警戒レベルが使用されるのに対し、中国では4段階の警戒レベルが使用されており、色情報も異なる。「注意報」や「警戒レベル」を直訳すると、中国語母語話者に通じない恐れがある。防災用語の翻訳では、単なる文字・語彙レベルの対応ではなく、専門用語体系や防災制度、受け手側の理解を考慮した翻訳方略が必要だと考えられる。

次に、改善した中国語訳の分かりやすさを確認するために、改善前後の中国語訳を日本語未習者～日本語能力試験N1レベルの中国語母語話者に提示し、5段階尺度による理解度課題を実施した。その結果、改善した中国語訳のほうがより分かりやすいことが明らかになった。

【参考文献】

河原清志(2014)。「翻訳戦略論の批判的考察」『翻訳研究への招待』12:121 - 140.

【参考ウェブサイト】

国土交通省気象庁(2026年5月29日に閲覧)

<https://www.data.jma.go.jp/developer/multilingual.html>

中国政府网 中国气象局令(第16号)《气象灾害预警信号发布与传播办法》

https://www.gov.cn/gongbao/content/2008/content_912553.htm

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))10:40 – 11:10

C-7 司会: 野原佳代子

災害時における通訳・翻訳コーディネーターの役割: インタビュー調査から
山浦育子(江戸川区多文化共生センター)

外国人が日本で生活する上では、「言葉の壁・制度の壁・心の壁」が存在し、とりわけ災害時にはそれらが顕在化する。災害時に外国人住民が直面する課題は、「災害直後」「避難所生活期」「生活再建期」といった各段階で異なるため、状況に応じた支援が求められる。その中でも、多言語による情報提供の重要性が指摘されている。田村(2018)によると、情報の多言語化には大きく 3 つの効果があるという。1 つ目は「翻訳効果」で、情報を翻訳して伝えることで、言葉の壁を乗り越えることができる。2 つ目は「承認効果」で、外国語の表示があることで、社会から外国人の存在を認識していること、また外国人が自分の言語があることによる安心感をもたらしている。3 つ目は、日本人が多言語表示を目にすることによる「アナウンス効果」である。避難所に「日本語以外の言語を話す人」がいる、災害で困っているのではないかなどの地域や組織全体で認識することができる。すなわち、情報伝達の正確性向上に加え、外国人の存在を社会が認識することによる安心感の醸成、さらに地域全体で外国人の存在や課題を共有する契機となる点である。

本研究では、2024 年度の特定期間研究として、災害時の外国人支援経験者 6 名に半構造化インタビューを実施し、その語りを分析した。対象者は、災害多言語支援センターの設立や運営に関わった NPO 代表、国際交流協会職員、指定管理者、外国語相談員等であり、それぞれの立場から実践経験を語った。分析の結果、①被災地のニーズ把握、②情報の多言語化と適切な内容選択、③支援を調整するコーディネーターの役割の重要性が明らかとなった。特に、ニーズに応じた資源を調整する人材の不在は支援活動全体の停滞につながることで、またセンター設立時には活動を支える枠組みや環境整備が不可欠であることが指摘された。さらに、外部支援者と地域をつなぐキーパーソンの存在が、円滑な連携に大きく寄与することも示唆された。

また、阪神・淡路大震災以降の各災害における事例から、平時における外国人住民と日本人住民の関係構築の重要性が浮かび上がった。日常的な交流によって形成される「顔の見える関係」は、災害時の支援の実効性を左右する基盤となる。最終的に、地域の復旧・復興は外部支援のみに依存するものではなく、地域住民自身の主体的な関わりによって支えられることが示された。

【参考文献】

田村太郎(2018)平成 30 年度「災害時外国人支援情報コーディネーター養成するための研修」講義①「災害時における外国人対応について」p.9

総務省(2019)「災害時外国人情報支援コーディネーター養成研修の過去の資料」https://www.soumu.go.jp/main_content/000798077.pdf(アクセス日:2026-05-07)

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))11:20 – 11:50

C-8 司会: 野原佳代子

The Future Role of Disaster Translation

Nana Sato-Rossberg (SOAS University of London)

Today, we live in an "era of polycrisis." In Japan, emergencies are anticipated, including earthquakes, fires, and geopolitical contingencies. During crises, while access to information is vital, migrants lacking proficiency in the local language and culture face vulnerabilities that limit their ability to navigate danger. This is where intercultural and translation studies can make practical contributions.

For instance, a study of Australian crisis communication highlights that while translation technologies and professionals reduce health risks, they are not adequately integrated into policy frameworks; the research consequently argues for updating policies to better support multicultural communities (Véliz-Ojeda, Yu, and Wilson 2020). Furthermore, Federici (2021) examines crisis translation systems to ensure multilingual minorities receive critical information, highlighting the necessity of structured communication strategies. Similarly, Cadwell (2025) examines how translation built community trust during the 2011 Great East Japan Earthquake, while analysing the representation of foreign nationals in disaster policies.

In Languages, Cultures, and Health in a Global City (2026), Marten and Sato-Rossberg examine how London's diaspora communities translated health discourses during COVID-19. To capture insights, they compiled empirical data from surveys and interviews with nearly 200 community members across over a dozen language groups. Their findings reveal that standard translation and interpreting alone are insufficient for migrants, highlighting the need for deeper cultural mediation and tailored communication. Specifically, intercultural communication must account for migrants' diverse backgrounds. However, securing human resources capable of providing such nuanced support during disasters remains a challenge. Consequently, major cities like London—following the 2017 Grenfell Tower fire—have introduced initiatives utilizing communication devices and applications to alert migrants in their own languages.

This presentation explores how empirical data from prior research on crisis translation and interpreting can be applied in practice during disasters. To achieve this, it utilizes Katsuya Yamori's theory of the "Evacuation Switch" (2020), which offers significant potential for responding effectively to future crises.

Cadwell, P. (2025). "Representations of foreign nationals in Japanese disaster risk reduction policy: Increasing alignment with a "whole community" discourse." *Disaster Prevention and Management: An International Journal* 34(6): 1–17.

Federici, F. M. (Ed.). (2021). *Intercultural crisis communication: Translation, interpreting and languages in local crises*. London: Bloomsbury Academic.

Marten, L., and Sato-Rossberg, N. (2026). *Languages, cultures, and health in a global city*. London/New York: Routledge.

Takenouchi, K., and Yamori, K. (2020). "Synergistic integration of detailed meteorological and community information for evacuation from weather-related disasters: Proposal of a "disaster response switch"." *International Journal of Disaster Risk Science* 11: 762–775.

Véliz-Ojeda, E., Yu, C., and Wilson, R. (2020). "The role of language technologies and government policies to facilitate and support effective multicultural and multilingual crisis communication". [Melbourne: Monash Intercultural Lab](#). [Accessed: 30 May 2026].

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))13:00 – 13:30

C-9 司会:大久保友博

中国清朝の2つの翻訳論の比較

北村彰秀(モンゴル聖書宣教会)

中国清朝は満洲民族が漢・モンゴル・チベット・ウイグル民族の居住地域を支配する広大な帝国であったため、異民族どうしの交流があり、そのためにいくつかの翻訳論も生まれた。そのうち、繙清説と学者基本典(別名賢者の源泉、賢者の源等)の序文中の翻訳論は以前から知られていた。そのため、この2つの翻訳論を比較し、清朝の翻訳状況を見てみたい。

以下、繙清説の要旨を述べつつ、それに対応する基本典の個所をあげてみる。

1. 翻訳者は注意深くなければならない。～(基本典)よく注意して翻訳すべきである。
2. 原文の意味を十分に理解すべきである。～言葉と意味の対応をよく調べ・・・
3. 原文のニュアンスにも注意を払うべきである～その語の持つニュアンスによく注意を払うべきである。
4. 基本的には、・・・そのまま訳すべきである。～チベット語の語順通りに翻訳すればわかりやすく、意味が変化しない場合にはそのまま翻訳する。
5. もし語の追加が必要な場合は追加する。～少し語を追加しないと、意味が十分に表現できない場合には、語を少し加えて訳す。
6. 語を減らすことが必要であればそうする。～翻訳不要の語を省略してもよい。
7. 語順を換えた方がよいときはそうする。～単語の順序を換えればわかりやすくなる場合、順序を換えて翻訳する。

これを見ると、2つの翻訳論が、他方を見ることなしに成立したとは考えられない。

また、繙清説は 1740 年に出ているが、基本典の著作年は 1741～1742 年である。さらにまた、基本典は満洲皇帝の勅令によってできたが、繙清説も中央からという性格が強い。このようなことから、2つの翻訳論の間には深い関係があることが推測される。

なお、繙清説はSL(原語)寄りの訳(逐語訳)を強く主張しているが、基本典の巻末ではRL(読者言語)寄りの訳が主張されており、繙清説に変更を加えようとしているのは興味深い。

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))13:40 – 14:10

C-10 司会:大久保友博

英語の観光ガイドブックにおける文化特有アイテム(CSI)の翻訳分析:翻訳手法の観点から
浦 修子(大阪体育大学)、高橋 絹子(関西大学)

本研究では、日本を紹介する英語の観光ガイドブックにおける文化特有のアイテム(Culture Specific Items 以下 CSI)を対象に、それらの翻訳手法について定量的(出現頻度の集計)および質的(具体的な訳例の分析)な分析を行い、日本語の文化特有アイテムが英語においてどのように表現・処理されているか、ならびにどのような傾向があるのかを明らかにする。

先行研究では、観光関連のガイドブックが旅行者の認識形成に影響を与えることが指摘されてきた。その際に、翻訳は重要な役割を果たすと考えられる。先行研究では、CSIと翻訳手法の関係に着目した研究は存在するものの、その体系的な分析は十分に行われてこなかった。しかし浦(2026)では、『ロンリープラネット京都版』(2015)の分析を行い、Lawrence Venuti(1995/2008)の理論を基盤とし、Turzynski-Azimi(2021)などの先行研究を参照しつつ、異質化(foreignization)と受容化(domestication)(Venuti, 2008)の観点から分析を行っている。その分析の結果、異質化が4,108件(61%)と最も多く、ソース文化(Source Culture)の固有性を保持する傾向が強いことが明らかとなった。一方、受容化は527件(8%)にとどまり、文化的負荷を軽減する訳出は限定的であった。また、両者を組み合わせた複合型は2,087件(31%)確認され、文化的特異性を保持しつつ読者の理解を補助する機能を果たしていると考えられる。

さらに、CSI カテゴリー別の分析では、社会カテゴリーが5,616件と全体の大半を占め、宗教儀礼や生活習慣に関する表現が特に多く見られた。これらは観光資源として重要である一方、読者の理解を補うために説明を付加する翻訳手法が多用される傾向にある。一方、歴史および自然カテゴリーでは異質化が優勢であるが、過度な異質化は読者の理解を阻害する可能性も示唆された。

以上の結果から、観光翻訳においては文化特有性の保持と読者の理解の促進のバランスが重視されており、CSIのカテゴリーに応じて翻訳手法が調整されていることが明らかとなった。では、この傾向は他のガイドブックの翻訳にも見ることができるのか。または異なった翻訳の方略が取られているのか、他と比較を行った結果を本発表では明らかにしていきたい。本研究は、英語の観光テキストにおける翻訳手法の選択が文化表象の形成に与える影響を示すとともに、翻訳実務および用語管理への示唆を与えるものであることを期待する。

【参考文献】

Venuti, L. (2008). *The Translator's Invisibility : A History of Translation* (2nd ed.)
Routledge.

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))14:20 – 14:50

C-11 司会: 石塚浩之

逐次通訳の情報処理モデルについて
晏 昭平(城西国際大学 D)

本研究では、逐次通訳における情報処理を説明する新たな理論モデルを提案することを目的とする。これまで通訳の情報処理を説明する代表的理論としては、Seleskovitch & Lederer の意味の理論、Gerver の情報処理モデル、Moser の情報処理モデル、Gile の努力モデル、そして Setton の認知的・語用論的同時通訳モデルなどが挙げられる(水野, 2000)。しかし、意味の理論と努力モデルは、意味理解に言語的要因が関与することには触れているが、具体的な言語形式の働きについては十分な検討がなされていない。Gerver の情報処理モデルと Moser の情報処理モデルは、処理容量、記憶、注意の役割を重視する点に特徴があるが、起点言語から目標言語への変換過程については十分に扱われていない(水野, 2000)。すなわち、この二つのモデルも具体的な言語情報それ自体への焦点化が必ずしも十分ではない。これに対して、Setton の認知的・語用論的同時通訳モデルは、Sperber & Wilson の関連性理論、Johnson-Laird のメンタルモデル理論、Fillmore のフレーム意味論(frame semantics)を理論的基盤とする語用論的同時通訳理論である(水野, 2000)。Setton(1999)は関連性理論を援用し、話し手がコミュニケーション意図を明示することによって、聞き手が推論を通じて合理的な努力で最大の文脈効果を引き出せるよう保証するのだと述べている。Setton の認知的・語用論的同時通訳モデルは、確かに言語的要因そのものにも一定の注意を払っている。しかし、聞き手が話し手の意図を推論する際の根拠が、具体的にどのような言語形式に基づくのかについては十分に特定されていない。また、言語形式の理解に関しては Fillmore のフレーム意味論が参照されている。同理論では、語の理解にはその語と関連するあらゆる世界知識へのアクセスが不可欠であるとされる(水野, 2015: 67)。このモデルも言語そのものに関する処理への検討は十分ではないといえる。

既存の通訳理論は、認知処理や通訳操作に重点を置く傾向が強く、作業言語そのものへの関心が著しく不足している。したがって、既存理論をふまえて、言語的側面と認知的側面を一体的に捉える通訳の情報処理モデルを再検討する必要がある。この点をふまえて、本研究では努力モデル、関連性理論、選択体系機能言語学を基盤として、逐次通訳における情報処理モデルを提示する。本モデルが言語情報の処理を行う際の主要な理論的枠組としては言語そのものを中心に論じる選択体系機能言語学を位置づけている。本研究の知見は、通訳の情報処理の理論的枠組みの再検討に寄与するとともに、通訳教育において談話レベルの理解能力を育成する必要性を示唆するものである。

【参考文献】

水野的 (2000) 「通訳理論研究の地平」『通訳研究』0 (0), 53-68.

水野的 (2015) 『同時通訳の理論: 認知的制約と訳出方略』朝日出版社.

Setton, Robin (1999). *Simultaneous Interpretation: A cognitive-pragmatic analysis*. Amsterdam: John Benjamins.

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F)) 15:00 – 15:30

C-12 司会: 石塚浩之

Machine Translation Error Analysis of Japanese Nursery School Documents: A Study of Google Translate from Japanese into Uzbek

Zebiniso Izzatillaeva (Kinjo Gakuin University M)

This study investigates the accuracy and limitations of Google Translate in multilingual communication between Japanese nursery schools and Uzbek parents living in Japan. The research analyzes machine translation errors in four types of nursery school documents translated from Japanese (SL) into Uzbek (TL): *kurasu dayori* (class newsletter), *en dayori* (nursery newsletter), *menyu* (monthly menu), and *shika kenshin kekka no oshirase* (dental checkup result notice).

The focus on Uzbek parents is motivated by the rapid growth of the Uzbek population in Japan in recent years. According to the Ministry of Foreign Affairs of Japan, the number of Uzbek residents in Japan reached 7,261 as of June 2025. As increasing numbers of Uzbek families settle in Japan and raise young children, communication between parents and nursery schools has become an important area requiring language support. Previous research found that more than 80% of surveyed Uzbek parents relied on translation applications, family support, or gestures to communicate with nursery schools, indicating persistent language barriers (Izzatillaeva, 2026).

The selected documents were chosen because they contain essential information regarding children's daily activities, school events, health conditions, and dietary needs. Monthly menus are particularly important for many Uzbek families due to halal dietary considerations. The study is further informed by findings that identified cases of miscommunication between parents and nursery school staff, including missed deadlines and difficulties understanding school notices (Izzatillaeva, 2026). Such incidents demonstrate the importance of accessible language support for immigrant families.

Google Translate was selected because it provides free and offline translation services across more than 240 languages (Google, 2025). This study evaluates the extent to which the system can adequately translate nursery school documents and identifies common translation errors, including omission, inaccurate lexical choice, grammatical errors, word-order problems, and mistranslation of culturally specific expressions (Vilar et al., 2006).

The findings are expected to provide insights into the strengths and limitations of machine translation in nursery school communication and may help educators, childcare professionals, translators, and local institutions better support multilingual families and Uzbek parents residing in Japan.

Vilar, D., Xu, J., D'Haro, L. F., & Ney, H. (2006). Error analysis of statistical machine translation output. *Proceedings of the Fifth International Conference on Language Resources and Evaluation*, 697-702.

http://www.lrecconf.org/proceedings/lrec2006/pdf/413_pdf.pdf

Google. (2025, April 28). *Fun facts for Google Translate's 20th birthday*. Google Blog. <https://blog.google/products-and-platforms/products/translate/fun-facts-google-translate-20-years/>

Izzatillaeva, Z., & Ashurova, U. (2026). Language support for Uzbek parents in Nagoya: Translating and interpreting nursery school documents. *IJASOS- International E-Journal of Advances in Social Sciences*, 33, 55-70. <https://doi.org/10.5281/zenodo.18150844>

第2日(8月30日) C会場(109+159(教育学部棟 1F))15:40 – 16:10

C-13 司会: 石塚浩之

What EEG reveals about SI with automatic subtitles: From theta power to brain-network dynamics

Tianyun Li (Changzhou University)

This presentation first reports the electroencephalographic (EEG) findings of a recently published study (Li & Chmiel, 2024) and then previews an exploratory reanalysis of the same data using network-level methods.

In the original study, 23 professional conference interpreters interpreted a video-recorded speech from English (L2) into Polish (L1) under five conditions: a no-subtitle baseline and four levels of ASR-subtitle precision (100%, 95%, 90%, and 80%). Cognitive load was indexed primarily by frontal theta power. At the left frontal site it decreased in some subtitled conditions relative to the baseline, we proposed that the processing cost of an extra channel is offset by the cognitive gain of visual prompting. A follow-up reanalysis examined which networks took the lead, and how tightly distant regions and brain rhythms coordinated with one another. The 95% condition was the most revealing. Because a few errors could still slip through, interpreters apparently could not fully trust the text and had to keep checking it against what they heard - and it was here that the brain's effortful control-and-working-memory network engaged most strongly. It produced the single clearest effect in the whole dataset, centred on a right frontal region associated with cognitive control. When the subtitles were completely reliable (100%), the brain appeared to switch to a more economical mode: it leaned on the posterior, reading-related regions of the brain, eased the effortful frontal control seen at 95%, and showed signs of freeing up spare capacity.

Boos, M., Kobi, M., Elmer, S., & Jäncke, L. (2022). The influence of experience on cognitive load during simultaneous interpretation. *Brain and Language*, 234, 105185. <https://doi.org/10.1016/j.bandl.2022.105185>

Botvinick, M. M., Braver, T. S., Barch, D. M., Carter, C. S., & Cohen, J. D. (2001). Conflict monitoring and cognitive control. *Psychological Review*, 108(3), 624–652. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.108.3.624>

Li, T., & Chmiel, A. (2024). Automatic subtitles increase accuracy and decrease cognitive load in simultaneous interpreting. *Interpreting / International Journal of Research and Practice in Interpreting*, 26(2), 253–281. <https://doi.org/10.1075/intp.00111.li>

Seeber, K. G. (2017). Multimodal processing in simultaneous interpreting. In J. W. Schwieter & A. Ferreira (Eds), *The Handbook of Translation and Cognition* (1st edn, pp. 461–475). Wiley. <https://doi.org/10.1002/9781119241485.ch25>

第2日(8月30日) ポスター発表会場(教育学部棟ラウンジ(158前))12:00 – 12:50

P-1

Translating “Hong Shao Rou”: A Skopos-Theoretical Analysis of Chinese Recipe Translation in Online English-Language Media

Ruisi Han (International Christian University M)

Recipe translation remains understudied within Translation Studies, despite cooking instruction being among the most ubiquitous pragmatic texts crossing linguistic borders. Chinese cuisine poses acute challenges: dish names carry figurative and historical meanings, ingredients refer to culture-specific items, and cooking techniques are more lexically differentiated in Chinese than in English. The proliferation of online food platforms has multiplied English renderings of Chinese recipes far beyond traditional cookbooks, producing a heterogeneous corpus of “translations” whose source-text relationships are often unstated. Previous researchers (Ng et al., 2025) have shown that strategies such as transcreation, foreignization, and domestication mediate the preservation or loss of cultural and culinary nuance. However, what they often overlook is the variety of venues, including user-generated online content, in which recipes are translated.

This research applies Skopos theory (Reiss and Vermeer, 1984) and Nord (2001) functionalist framework to English translations of “Hong Shao Rou”, asking how strategies serve each translation’s inferred purpose rather than fidelity to a fixed source. The dish is selected for its representativeness, regional variants, and density of translation problems. A comparative corpus analysis covers twenty English online versions across four source types: diasporic Chinese food bloggers, non-Chinese food writers, direct translation of Chinese language recipe sites, and machine-translated outputs. Using Nord’s (2005) documentary/instrumental distinction, a coding scheme captures strategies across six categories: dish name rendering, paratextual framing, ingredient terminology, technique verbs, procedural explicitation, and visual presentation. Quantitative frequency counts combine with qualitative close readings to situate each text within its inferred Skopos. Results will show how inferred Skopos, alongside translators’ attitudes towards culinary authenticity and Chinese identity, explains the differing translation patterns observed across four source types. By foregrounding the multiplicity of legitimate Skopos, the study challenges evaluative frameworks that privilege a single “correct” culinary translation, contributing to discussions of Chinese culinary translation in digital, user-generated text genres.

Ng, L., Soo, R., Yeap, C. (2025). Untranslatable Flavours: Examining the Loss of Culinary and Cultural Nuance in Chinese-to-English Dish Name Translation. *3L The Southeast Asian Journal of English Language Studies*, 31(3).

Nord, C. (2001). *Translating as a Purposeful Activity: Functionalist Approaches Explained*. : Routledge.

Nord, C. (2005). *Text Analysis in translation: Theory, methodology, and didactic application of a model for translation-oriented text analysis*. : Rodopi.

Reiss, K., & Vermeer, H. J. (1984). *Towards a general theory of translational action : skopos theory explained*. : Routledge.